

『男はつらいよ』 おぼえがき

高野敦志



目次

はじめに

テレビ版「男はつらいよ」

第一作「男はつらいよ」

第二作「続・男はつらいよ」

第三作「男はつらいよ フーテンの寅」

第四作「新・男はつらいよ」

第五作「男はつらいよ 望郷篇」

第六作「男はつらいよ 純情篇」

第七作「男はつらいよ 奮闘篇」

第八作「男はつらいよ 寅次郎恋歌」

28 25 23 20 18 15 13 11 6 1

第九作「男はつらいよ 柴又慕情」

第一〇作「男はつらいよ 寅次郎夢枕」

第一一作「男はつらいよ 寅次郎忘れな草」

第一二作「男はつらいよ 私の寅さん」

第一三作「男はつらいよ 寅次郎恋やつれ」

第一四作「男はつらいよ 寅次郎子守唄」

第一五作「男はつらいよ 寅次郎相合い傘」

第一六話「男はつらいよ 葛飾立志篇」

第一七話「男はつらいよ 寅次郎夕焼け小焼け」

第一八話「男はつらいよ 寅次郎純情詩集」

第一九作「男はつらいよ 寅次郎と殿様」

第二〇作「男はつらいよ 寅次郎頑張れ！」

31

34

37

40

43

46

50

53

56

59

62

65

第二一作「男はつらいよ 寅次郎わが道をゆく」

第二二作「男はつらいよ 噂の寅次郎」

第二三作「男はつらいよ 翔んでる寅次郎」

第二四作「男はつらいよ 寅次郎春の夢」

第二五作「男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花」

第二六作「男はつらいよ 寅次郎かもめ歌」

第二七作「男はつらいよ 浪花の恋の寅次郎」

第二八作「男はつらいよ 寅次郎紙風船」

第二九作「男はつらいよ 寅次郎あじさいの恋」

第三〇作「男はつらいよ 花も嵐も寅次郎」

第三一作「男はつらいよ 旅と女と寅次郎」

第三二作「男はつらいよ 口笛を吹く寅次郎」

101

97

94

91

88

85

82

79

77

74

71

68

第三三作	「男はつらいよ	夜霧にむせぶ寅次郎」	105
第三四作	「男はつらいよ	寅次郎真実一路」	108
第三五作	「男はつらいよ	寅次郎恋愛塾」	111
第三六作	「男はつらいよ	柴又より愛をこめて」	114
第三七作	「男はつらいよ	幸福の青い鳥」	117
第三八作	「男はつらいよ	知床慕情」	121
第三九作	「男はつらいよ	寅次郎物語」	124
第四〇作	「男はつらいよ	寅次郎サラダ記念日」	127
第四一作	「男はつらいよ	寅次郎心の旅路」	130
第四二作	「男はつらいよ	ぼくの伯父さん」	132
第四三作	「男はつらいよ	寅次郎の休日」	135
第四四作	「男はつらいよ	寅次郎の告白」	138

第四五作	「男はつらいよ	寅次郎の青春」	141
第四六作	「男はつらいよ	寅次郎の縁談」	144
第四七作	「男はつらいよ	拝啓車寅次郎様」	147
第四八作	「男はつらいよ	寅次郎紅の花」	154
第四九作	「男はつらいよ	寅次郎ハイビスカスの花	159
		特別編」	154
	制作されなかった続篇		
	番外篇の「虹をつかむ男」		
	番外篇の「虹をつかむ男	南国奮斗篇」	

はじめに

今回、山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズ全作を見て、自分が感じたことをエッセイの形でまとめることにした。これは一種の「おぼえがき」であり、映画を見たことがない人にとつては、何の参考にもならないだろう。また、作品の印象を述べるに当たって、どうしてもあらずじに触れざるを得なかった。いわゆる「ネタバレ」の問題は、作品について論じる場合には、どうしても切り離すことができない。とはいっても、『男はつらいよ』のシリーズでは、余り大きな問題にはならない。久し振りに寅次郎とらじろうが柴又しばまたに戻ってきて、「とらや」の人たちと大げんかをする。飛び出していった旅先で、出会った女性と恋

に落ちるものの、相手にふられるか、自ら身を引いて失恋というパターンは、多少のバリエーションを示しながらも、大きく変わるところがないのだから。

では、なぜ、『男はつらいよ』のシリーズは人気を保ち続けてきたのか。懐かしい昭和時代の下町の人情、旅先で出会う日本各地の風俗を描いたからとも言われるが、車寅次郎くるまという主人公が、堅苦しい日常に縛られないアウトローであるところが大きい。寅次郎のように、他人との衝突を恐れずに本音ほんねが言いたい、世間せけんの常識などにとらわれずに、自由気ままに生きたという願望を、誰でも持っているからだろう。

さて、車寅次郎という主人公は、どのような形で生まれたの

だろうか。山田洋次監督は『寅さんの教育論』の中で、『男はつらいよ』を構想した経緯けいゐに関して、寅次郎を演じた渥美清あつみきよしの少年時代がヒントになったと述べている。

渥美さんは、三日ぐらいにわたって、旅館の部屋でごろごろしながら、いろんな話をしてくれたんです。いわばその話の内容が、「寅さん」という映画の原型となっていると思うんですけれど、それは主として彼の少年時代の思い出話でした。

そこから葛飾柴又かつしか、帝釈天たいしゃくてんの参道、団子屋に車寅次郎という不良少年といった設定が自然に浮かんできたという。勉強についていけず、授業が分からなくても、渥美少年には学級の生徒の心をなごますという特技があった。一見役に立たないように思えるものでも、必ず存在する意味がある。何でも杓子定規しゃくしじょうぎに扱う平成の世とは異なり、昭和時代には良い意味でのいい加減さもあった。温かく人の成長を見守る余裕もあった。山田監督が渥美清の死をもって、『男はつらいよ』シリーズの製作打ち切りを決意したのも、車寅次郎という主人公の原型が、少年時代の渥美清にあったからである。

観客は「とらや」の人々を家族のように感じ、封切られるたびに、懐かしい人々との再会を喜ぶ。現実の世界におけるように、寅次郎も中年、初老へと年を重ねていく。妹さくらの息子、

満男も幼児から小学生、中高生を経て、大学生、社会人へと成長していく。その間に観客自身も人生を重ねていく。毎回、寅次郎が引き起こす騒動と、恋と失恋というパターンを繰り返しながらも、時の流れというものを、観客の胸に刻んでいったのである。

テレビ版「男はつらいよ」

フジテレビで渥美清が主演するドラマがあり、その一つとして『男はつらいよ』は制作された。最初は「愚兄賢妹ぐけいけんまい」という仮題がついていたが、これでは余りに固すぎるということで、現在のタイトルが選ばれたという。このシリーズは台詞せりふを聞かせ、語るだけで場を持たせることができた俳優、渥美清がいたからこそ成り立った作品だということだ。

フジテレビには、テレビ版の第一回と最終回が保存されており、残っていない他の回も、写真などは保存されており、DVDにはそれらも収録されている。一九六八年（昭和四三）の制作で、画質は当時の白黒テレビの標準である。

配役に関しては、車寅次郎が渥美清、おいちゃんの竜造（映画版の「りゆうぞう」とは異なり、「たつぞう」が森川信、舎弟の川又登が津坂匡章、英語教師の坪内散步が東野英治郎などは、映画版でも引き継がれた。さくらは長山藍子、おぼちゃんをつねが杉山とく子、さくらの夫は博士という医師で、井川比佐志が演じていた。映画版では舎弟の源公を演じた佐藤蛾次郎が、テレビ版では寅次郎の異父弟雄二郎として出演している。

テレビ版では妹さくらが、十数年ぶりに帰郷した寅次郎と、満員電車の中で再会するが、さくらは不審な男につけられていると誤解する。「とらや」で再会を喜ぶわけだが、寅次郎は早速、極道の仲間を「とらや」呼び込み、どんちゃん騒ぎを起こす。おいちゃんの竜造も悪乗りしているので、おぼちゃんをつねに座敷から引きずり出される。杉山とく子のおぼちゃんは、三崎千恵子のおぼちゃんと比べると、かなり気丈である。

極道の仲間に酌をさせようとすると、さくらは自分は芸者じゃないとして断る。顔を潰された寅次郎は、かっとなって「とらや」を出ていくが、行った先は英語教師の坪内散步の所である。先生の娘に寅次郎が恋心を描くところや、先生にうなぎを食べさせたいと思いつながら、先生が急逝するところなど、映画版の第二作「続・男はつらいよ」に引き継がれている。紛らわしいのは、テレビ版では坪内先生の娘が冬子なのに、映画では坪内夏子に変更されている点、映画版で登場する御前様の姓

も坪内で、娘が坪内冬子であるという点。

では、大きく異なる点はどこかと言えば、おいちゃんとおばちゃん「とらや」をたのみ、アパート暮らしを始めるところ。

「とらや」は喫茶店に変わってしまう。寅次郎は異父弟の雄二郎と、ハブで一儲けしようとする奄美大島あまみおおしまに出かけるが、逆にハブに噛まれて命を落とす。さくらは寅次郎の死が信じられず、また帰ってくると思っているが、寅次郎の幻まぼろしを見たことで、寅次郎の死を実感する。この結末に対し、視聴者から多くの抗議の声が寄せられたことが、映画版の制作につながったという。

実際に見たのは第一回と最終回だけだが、映画版と比べると、やはり本格的なドラマというより、笑劇しょうげきの延長といった感じである。手探りで作っているという印象が強い。「とらや」が

葛飾柴又にあるという感じがしない。寅次郎が各地を旅して、新たな恋人を作るというパターンはまだ確立していない。

第一作「男はつらいよ」

一九六九年（昭和四四）に封切られた山田洋次監督の作品。実は、映画以前にもテレビ番組としても制作されていた。最終回に寅次郎が奄美大島でハブに噛まれて死んでしまったので、それを見た視聴者から、フジテレビに抗議の声が寄せられたという。

テレビ版の人気から映画化の話が出て、第一作として出たのがこの作品である。まさかシリーズ物として、延々と製作されるとは思わなかったので、副題はつけられていない。寅次郎の両親と兄が死んで、たった一人生き残った妹さくらに会いに、寅次郎が二十年ぶりに故郷柴又に戻ってくるところから物語は

始まる。さくら役の倍賞千恵子が、可愛らしい娘なのに驚いた。第一作ということもあり、寅次郎の出自について詳しい説明がある。礼儀正しい挨拶が始まったかと思いきや、お馴染みのドタバタが始まり、寅次郎はさくらのお見合いをぶちこわす。それがさくらと、印刷工博とを結びつけるきっかけになる。帝釈天を祀る題経寺では、日蓮聖人のお会式をしていたり、紫の衣をつけた御前様が登場したり、寅次郎の恋の相手が御前様の娘冬子である点などは目を引くが、ストーリー展開の原型は、すでに出来上がっている。

第二作「続・男はつらいよ」

山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズの第二作。このシリーズの特徴は、最初に寅次郎が夢を見ること。それが物語の筋と何かしら関わっている。「酔生夢死」を地で行っている渡世人寅次郎の人生を象徴するようだが、夢が現実とずれているところが、またコミカルである。

今回、寅次郎は生みの母、菊に会いに行く。連れ込み宿を経営する菊に、「金を無心に来たのか」と言われて逆上して飛び出す。ただ、話の中心は英語塾の恩師、坪内先生との再会と、娘の夏子へのほのかな思いである。寅次郎が失恋するのは、このシリーズの既定路線なのだが、それに追い打ちをかけている

のが、恩師坪内先生の死である。こんなに泣いてばかりいる寅次郎も珍しい。

このままでは、悲しくて陰気な話に終わってしまう。それを和らげてくれるのが、寅次郎失恋後の後日譚である。生みの母にすげなくされ、恩師の死と失恋に傷ついた寅次郎は、突き放した生みの母、菊にもう一度会いに行く。歯に衣を着せぬ物言いは、ミヤコ蝶々がはまり役である。口の悪い者同士本音で話している姿を、新婚旅行中の夏子が見かけるといふ設定である。世阿弥は『風姿花伝』で陰と陽のバランスの大切さを説いたが、実母と元氣よく語らう寅次郎の姿を添えることで、陰に傾きすぎた内容に陽の要素を付け加えているのである。

第三作「男はつらいよ フーテンの寅」

極道の寅次郎は、散々周囲をひっかき回す。自分は幸せになれないけれども、人間にとって何が大切かは分かっている、困っている男女がいると、仲を取り持つ役を買って出る。いわゆるトリックスターという存在で、沈滞した世間を混乱させることで、本来あるべき姿を思い出させてくれるのである。

今回、寅次郎に見合いの話が出る。ところが、相手の駒子という女は古くからの知り合いで、浮気した男への腹癒せのために、お見合いを申し出ただけだった。寅次郎は駒子と相手の男の仲を取り持つまではよかったが、仕出し弁当に酒、芸者にハイヤーまで呼んで祝宴を開く。費用はすべて「とらや」持ちと

言い出して、おいちゃん夫婦と大げんかして飛び出す。柴又を飛び出さないと、寅次郎の物語は進展しない。

湯の山温泉の古い旅館で、番頭として寅次郎は働くようになる。女将がきれいな未亡人お志津だったからである。寅次郎はお志津に一目惚れするが、どうなるかは毎度の定番である。今回新鮮だった手法としては、失恋した寅次郎が、初詣の中継に登場して、「とらや」の人たちをびっくりさせるという設定である。そこでも、寅次郎はお志津の名前を口にしていた。懲りない男である。

時に一九七〇年（昭和四五）。貧しい父を助けるために、娘が妾奉公に出る話が出てくる。確かにまだ日本は貧しかった。バスが大人三十円、子供十五円の時代。三十円のコーヒー牛乳

がごちそうで、いつも母にねだっていたものである。

第四作「新・男はつらいよ」

山田洋次の『男はつらいよ』は、寅次郎が引き起こす騒動と、寅次郎のかなわぬ恋という構成が定番だが、今回は前半のドタバタ劇に力が入っている。競馬で大当たりを取った寅次郎が、世話になったおいちちゃん、おばちゃんとハワイ旅行することを計画する。

ところが、旅行会社の社長に金を持ち逃げされる。「とらや」の一行がハワイ旅行することは、町内の評判になっていたから、三人は日が暮れてからこつそり「とらや」に戻る。そこに泥棒が入ってきたから、警察に突き出すとハワイに行っていないことがばれてしまう。そこで、口封じに「泥棒に追い銭」の羽目

に陥る。結局、警官に捕まった泥棒が「とらや」に逃げ込み、面目丸つぶれになって大げんかが始まる。

後半の恋物語は、結構あつけない。空いていた寅次郎の部屋に、春子という幼稚園の先生が下宿する。一部屋だけ借りて、賄い付きなんてスタイルは、昭和四十年代によくあつたが、親類でもない者と同居することには、今の日本人には抵抗があるだろう。外国人をホームステイさせるといふ習慣は残っているが、心の傷ついた春子を、寅次郎は必死に慰めようとするが、春子には恋人がいたことが判明し、寅次郎の一方的な片思いは終わる。作品の中で佐良直美の「世界は二人のために」が流れていた。そういえば、自分が小学生の頃にはやっていたのを思い出した。

第五作「男はつらいよ 望郷篇」

冒頭で寅次郎は夢を見る。世話になったおいちちゃんが危篤となった夢を。「お兄ちゃん、泣かないで」とさくらが言っているのが、「お客さん、そんなところで寝ていると風邪引くよ」という仲居さんの声に変わる。これを虫の知らせかと思つて、寅次郎は「とらや」に電話する。「息をしているだけだよ」というおばちゃんの冗談を真に受けた寅次郎は、御前様や近所の人においちちゃんが危篤だと話し、挙げ句の果てに葬儀屋まで呼んでしまう。

これが落語で言えば「枕」の部分である。それが連想を誘うように、竜岡親分の危篤の知らせが入る。札幌に飛んだ寅次郎

は、親分がまだ見ぬ息子に一目会いたいと言って涙を流すのを聞く。探し当てた息子の説得もままならぬまま、親分の死を知った寅次郎は、人生の無常を感じて、汗水流して働くことの大切さを悟る。

寅次郎が働き始めたのは、まだ漁師町だった頃の浦安である。豆腐屋で仕事に精を出す寅次郎だったが、娘の節子せつこに心引かれたからだだった。節子に「ずっとここにいてほしい」と言われた寅次郎は、これをプロポーズだと早合点する。実は節子には恋人がおり、結婚して高崎に引っ越すので、母親の店を寅次郎に手伝っていてもらいたかったのだ。真つ当な生き方をしようとして、失恋するいつもの顛末である。

節子を演じたのは、テレビ版でさくら役だった長山藍子、母

親役を演じたのは、テレビ版では「とらや」のおばちゃんだった杉山とく子である。当初は本作をもって『男はつらいよ』シリーズは打ち切りになるはずだったが、余りに好評だったために続篇が制作されることになる。

第六作「男はつらいよ 純情篇」

冒頭でテレビが「ふるさとの川 江戸川」という番組を流している。そこに映し出されたのは、柴又帝釈天の題経寺と御前様、次いで「とらや」のおいちゃん、おばちゃん、妹さくらである。望郷の念にさいなまれ、寅次郎は「とらや」に電話をかける。今までは柴又から電話をかけることが多かったが、今回は旅先の山口で、これから長崎の五島ごとうに向かうところだった。

寅次郎は旅先で子連れの女と出会い、女のふるさと、五島の実家に向かう。父親と娘の語らいを聞くうちに、寅次郎は「帰るところがあると思うからいけない」と悟る。悟りながらも望郷の念に負けて、柴又に舞い戻る。

その頃、「とらや」には遠縁とおえんの女夕子ゆうこが間借りしていた。夕子に対する好意と、さくらの夫、博の独立問題がからまつてくる。印刷工場の社長との対立も収まり、社長は工員らと博、さくらを誘って川下りを催すもよお。「木曾きその御嶽山おんたけさん」と謡いながら、舟下りしているのは江戸川である。

夕子の夫が現れて、寅次郎の片思いも終わる。毎度のごとく恋破れて、また旅に出る。もう帰ってこないと思いつつながら、帰ってくるのは、これで最後と思いつつながら、制作されていた『男はつらいよ』のシリーズと同じである。

第七作「男はつらいよ 奮闘篇」

第二作「続・男はつらいよ」で登場した生母菊が、「とらや」を訪ねてくる。葉書で寅次郎が結婚すると言つてよこしたので、顔を見たくなくなったのだという。しかし、寅次郎が失恋の連続であるのを知つて、再会したばかりの二人は言い合いとなる。売り言葉に買い言葉で、寅次郎は嫁さんを探しにいくと言つて飛び出してしまふ。

寅次郎は青森の津軽つがるから集団就職で上京しながら、紡績工場から飛び出した娘、花子と出会う。花子は知的障害者だが、麗うるわしい声で歌う美少女である。寅次郎は花子の就職先を探し、結局「とらや」で働かせることで落ち着く。

今回は知的障害者の少女がヒロインという点が変わっている。困っている少女を哀れんで、人助けしているつもりだったのだが、寅次郎の好意を喜んだ花子は、「お嫁さんになりたい」と言い出す。それを真に受けた寅次郎は、有頂天うちょうてんになるわけだが。本当は好意を寄せているに過ぎないことがうかがえる。素朴な形でしか思いを表現できない少女と、天真爛漫てんしんらんまんな寅次郎のコントラストがコミカルである。

中学や高校を卒業すると、東北の貧しい農村から、大量の子供たちが集団就職で上京した時代。冬の間は農作業ができない一家の大黒柱も、大都市の工事現場に出稼ぎ労働者として出て行った。一九七〇年代はいまだに地域格差の大きい時代だった。東北出身の若者でも、方言丸出しだったのは、遠い過去の時代

となった。

第八作 「男はつらいよ 寅次郎恋歌」

このシリーズの中で「寅次郎恋歌」を見たのは、これで何回目だろうか。日本語教育の教材にシナリオの一部が載っていて、読解の後に学生と見たものである。借りてきたDVDでは、日本語の字幕も表示できるので、江戸弁の早口でも、上級レベルの外国人学生なら理解できた。ユーモアとペーソスは、世界共通の感覚である。

今回は妹さくらの夫、博の母が危篤になる。葬儀の場面に現れた寅次郎は、妻に先立たれた博の父としばらく過ごし、人間の本当の生活とは何か、運命に逆らわない生き方こそ、幸せな生活ではないかと諭される。その場面に現れる竜胆の花が、寅

次郎の求めて得られぬ幸せの象徴として繰り返し出てくる。

今回、寅次郎が引かれるのは、柴又に喫茶店を開いた未亡人の貴子である。内気な少年学と遊んでやることで、寅次郎は頼もしい人として貴子の目に映る。旅をしながらの人生を夢に抱き、寅さんと一緒に行つてしまいたいとまで洩らす。

以前までの回とはちよつと空気が異なる。母子家庭の問題を抱え、女手一つで必死に子育てする姿が、単に色気のあるだけのヒロインにはない、ひたむきな印象を与える。初めて寅次郎の生き方に理解を示してくれる女性が現れたのである。とはいえ、このまま家庭を持つてしまったら、寅次郎の旅がらすの生活は終わる。貴子に思いを寄せられたまま、美しい思い出として胸にしまい、木枯らしの吹く夜に柴又を発つていく。このシ

リーズの中で、趣の深い作品の一つとして印象に残っている。

第九作「男はつらいよ 柴又慕情」

またもや夢から始まる。さくらと博がヤクザの取り立てに遭い、蒲団まで剥がされていくところを、寅次郎が助けるという場面から。不吉な夢が気になって柴又に戻ってくると、「とらや」の二階は「貸間」になっていた。さくらと博の夫婦が一軒家を建てるための資金にと、寅次郎の部屋を貸し出したからだった。そこに寅次郎が戻ってきて一悶着。啖呵を切つて「とらや」を飛び出したのだが、不動産屋に紹介された部屋が、実は「とらや」だったという落ちがついている。

今回からおいちちゃん役は、森川信から松村達雄に代わった。第八作の撮影後に急逝したからだだった。味のある演技だった

のが惜しまれる。二代目のおいちちゃん松村達雄は、第六作で女の子の藪医者役で登場したから、そのイメージが頭について離れない。

柴又を飛び出した寅次郎は、金沢で旅する三人の女たちと出会う。その中の一人歌子は、気難しい小説家の父を持つ娘だった。柴又で再会した寅次郎を頼もしく思う歌子だが、陶工の青年との結婚を父に反対されていたのだった。寅次郎は毎度のように、「いい人」を演じながら失恋する。

実は、僕は中学生の頃、初めて『男はつらいよ』のシリーズを見たのだが、何作目であるかはずっと分からなかった。旅する女たちと寅次郎の、出会いと交歓を、シネトラウスの「ウィーン」の森の物語」や「春の声」のバック・ミュージックで表現

する場面を見て、子供の頃に見たのはこれだと思ひ出した。
今回のヒロイン歌子役は、吉永小百合よしながさゆりが演じている。実に可憐で美しいと思つた。中学生の頃、好きだつた女優の一人で、初老となつた今でも、内面の美しさを感じさせる。早稲田大学の仏文科の恩師が、実は学生時代の吉永小百合を教えたという話を聞いた。授業に参加する日は、ファンが集まつて大変だつたらしいが、本当によくできる学生だつたとのこと。才色兼備さいしよくけんびの女優は、いつの時代でも貴重な存在である。

第一〇作「男はつらいよ 寅次郎夢枕」

改心した寅次郎に、見合い相手を探すことになつたが、フーテンの寅だと聞けば、ふざけんじやないと、先方が怒り出すのが落ち。みんなに馬鹿にされたとむくれた寅次郎は、「とらや」の人たちと大げんかして飛び出した。

やがて、「とらや」の二階に、御前様の甥おいで東大助教授の岡倉が引越してきた。二階でワーグナーを聴いたり、勉強の邪魔になるから静かにしてくれと言ふインテリは、「とらや」のようになぎやかな家には、最もふさわしくないタイプである。演じているのは米倉斉加年よねくらましかね。下宿する習慣がなくなつた現在では、こうした設定でドラマは組めなくなつたが。

そこに寅次郎の幼友達、千代が姿を現す。離婚して息子とも会えない千代を、寅次郎は慰めたいと思う。その千代に岡倉が一目惚れする。二人の仲を取り持ちたいと奔走する寅次郎だが、千代が好きなのは寅次郎の方だった。

寅次郎の方でも満更まんざらではなかったようだが、岡倉との仲を取り持とうとした立場から、千代の思いを受け容れることはできなかった。こうして寅次郎は、自ら結婚の機会を逃すのだった。

この作品で気になったのは、助教授の岡倉の描写である。大学の教師と言えば、小難しいことばかり考えていて、世間知らずの変人で、何かあれば狂人と紙一重かみひとえの状態になるというステレオタイプの描き方である。まあ、東京大学の先生は知らないが、現実の大学教師はこんなもんじゃない。男女の道に疎うといと

いうのも嘘である。もっと人間くさくて、どろどろした物を持っている。

第一一作「男はつらいよ 寅次郎忘れな草」

寅次郎ときくらの父の二十七回忌の法事をやっているところに、寅次郎がひよっこり現れる。御前様が読経よみきょうしている最中に、つまらぬいたずらをして、「とらや」の人たちを爆笑させ、法事を台無しにしてしまう。ちよつと気になったのは、御前様が『般若心経はんにやしんぎょう』を唱となえていたことだ。柴又帝釈天の題経寺にちれんじゅうは日蓮宗の寺院だから、『法華経ほけきょう』以外の経典きょうてんを唱えることはない。玉に瑕きずなので、ちよつと残念な気がした。

けんかして飛び出した寅次郎は、網走あばしりで売れない歌手リリーと出会う。一見あばずれといった風体ふうていの女で、旅をしながらあちこちのキャバレーで、酔っ払いを前にして歌っている。歌う

ことが好きで、夢を見ながら生きているが、現実にはつらいことが多い。夜汽車よぎしやの窓に明かりがともっていると、そこには平凡ながらも幸せな生活があるんだとつい涙が出てしまう。フーテンの寅さんの女版おんなばんみたいなリリーである。たちまち二人は意気投合いぎたごうしてしまう。

酪農家に住み込みで働き、堅気かたぎに生きようとした寅次郎だが、熱中症で倒れて柴又に戻る。そこにリリーが現れる。寅次郎の女性遍歴へんれきについて、「とらや」の人たちが話していると、リリーは「初恋の相手は寅さんだ」と言い出す。「とらや」の人たちの温かいもてなしに、リリーは感動するのだが、根はいい女でも寅さんの女版である。つらい出来事があった夜、泥酔して「とらや」を訪れ大騒ぎ、なだめる寅次郎に「話を聞いてくれ

ない」と啖呵を切って飛び出していく。寅次郎がふだんやってきたことである。

リリーは歌手をやめて、寿司屋の女房の座に落ち着くが、本当は寅さんの方が好きだったとさくらに洩らす。浅丘ルリ子が演じるリリー、寅次郎との相性が抜群な女歌手は、その後も寅次郎と関わっていくことになる。

第一二作「男はつらいよ 私の寅さん」

「とらや」のおいちゃん、おばちゃんに感謝の意味で、さくらと博は九州旅行を計画する。旅立つ前日に寅次郎が帰ってくる。隠し立てされたことにへそを曲げるわけだが、さくらに説得されて留守番を引き受ける。

普段は旅がらすの寅次郎だが、道中の安全を思っ^てやきもきする。おいちゃんたちが帰ってくるときは、ご飯を作^{って}風呂を沸かして待っている。立場がすっかり逆転している。寅次郎らしくない善人ぶりである。

そこに寅次郎の旧友文彦（かみひこ）が現れる。文彦の妹りつ子の家上がり込んだ寅次郎は、酔^{って}りつ子のキャンバスを汚^{して}しま

う。何てひどいことをと、りつ子はすごい剣幕である。寅次郎とりつ子の出会いも、典型とはかなり異なっている。

ところが、先日は失礼なことをしたと、りつ子の方から「とらや」に謝りに来る。りつ子の笑顔に、寅次郎はまた一目惚れしてしまう。ここでようやく、いつものパターンに入る。寅次郎に好感を持ちりつ子だったが、それはあくまで友達としてだった。

結婚よりも画家として生きていきたい、いつまでもいい友達でいまいしよと言われたら、それが相手の本心であっても、今まで通りに付き合っていくのは難しい。気持ちをすぐに切り換えられないところが、ドライになりきれないところが日本人らしい。寅次郎はつらくなり、旅がらすの生活に戻っていく。

りつ子を演じたのは岸恵子きしけいこである。フランス人の映画監督イヴ・シャンピと結婚し、パリで生活しながら、サルトル、マルロー、コクトーらの文人と親交を結び、娘ももうけたが、この作品が撮影された二年後の一九七五年、離婚するに至った。文筆家ぶんぴつかとしても知られる。センチメンスの長い、流麗りゅうれいな文を書く。「ああ西洋、人情うすき紙風船」を外国人の学生に読ませたら、読解に苦勞していた。プルーストの原文を日本人が読まされたように。

第一三作「男はつらいよ 寅次郎恋やつれ」

寅次郎が結婚したいと思っている絹代は、二人の子供を抱えて無我夢中で働く女性だった。引き合わせに温泉津にさくらを連れていった寅次郎だが、出奔しゅっほんしたままだった絹代の亭主はすでに戻ってきていた。しよっぱなから失恋というわけである。今回の特色は、ヒロインが再出演したという点にある。「男はつらいよ 柴又慕情」で登場した歌子である。気難しい小説家の父の反対を押し切って、陶工の青年と結婚した歌子だったが、すでに夫を亡くして、津和野つわのにある亡夫の家で意地の悪い姑しゅうとめ・小姑こじゅうととの生活を余儀なくされていた。

寅次郎と再会したことで、東京に戻る決心がついた歌子は、

柴又の「とらや」を訪ねてくる。夫を亡くした哀しみと、気難しい父に心が開けない思い、仕事を探す悩みを抱えた歌子を、何とかしてやりたいと思う寅次郎。恋愛という感じではなく、年下の女性をいたわる兄という立場がほほえましい。

歌子は父と和解し、伊豆大島の職場で保母の見習いとして働くようになる。優しく見守ってきた歌子が自立したことで、寅次郎の役目は終わった。そして、毎度のように夜遅く、そっと「とらや」を出て行く。旅がらすのついでに温泉津に寄り、夫と幸せそうに暮らす絹代と再会して幕が下りる。

この作品については賛否両論があるようだ。「男はつらいよ 柴又慕情」の続篇である本篇を制作したのは、前作で表現し

きれないものがあつたからかという点である。前作を制作した段階では、歌子は陶工と結婚し、幸せな人生を歩み出すところで終わっている。それなのに、人気女優の吉永小百合を再登場させるために、歌子の幸せが奪われる設定がなされたのではないかと、という憶測も可能だからだ。

僕自身の感想としては、たとえそうした意図があつたとしても、哀しみに沈む歌子の姿が切々と描かれた点や、前作では未解決だった歌子と父との和解もなされたという点で、少なからず心を動かされたので、続篇としては成功していると思われる。

第一四作「男はつらいよ 寅次郎子守唄」

『男はつらいよ』のシリーズで、おいちゃん車竜造は、配役が二度代わっている。初代の森川信は、寅次郎の叔父らしく、江戸っ子ならではの啖呵の切り方が堂に入っていた。気が短いところなども、血のつながりを感じさせるほどの名演技だったが、惜しくも病没により降板した。

二代目のおいちゃんは、松村達雄だった。このおいちゃんがなぜ降板したかは、よく知られていない。僕自身、最初においちゃんとして登場したときは、女好きの藪医者役のイメージが強くて、どうかかなと感じたのだが、さすがは名優、次作からはすっかり打ち解けた雰囲気になっていた。それなのにどうして

と思っていた。実は、松村自身も降板する意思はなかったという。しばらく続篇の制作はないという話を聞いて、盲腸の手術をすることにしたのに、続篇の制作が決まってしまい、やむなく代役を立てることになったらしい。その話を聞いて松村は激怒したという。

三代目の下條正巳しもじょうまさみは、最初は固辞するつもりだったらしいが、息子の下條アトムに勧められて引き受けることにしたという。最終作まで下條がおいちちゃん役を演じたため、途中から『男はつらいよ』のシリーズを見た観客にとつては、下條がおいちちゃんだというイメージが定着した。おいちちゃんとしての演技を見るのは、初めてではなかったためかもしれないが、頑固親父で口数が少ない、いかにも昭和時代の父親の雰囲気、すっかり

竜造役にはまっていた。

今回の作品で目を引く点は、旅先の唐津で他人に押しつけられた赤ん坊を、おんぶ紐ひもで背負った姿で寅次郎が現れ、「寅さんには子供がいた」という噂が柴又の町に広まってしまった点である。

おんぶ紐というのは、格好が悪いと思われているためか、ベビーカーがはやっているためか、すっかりすたれてしまった。ただ、おんぶ紐で背負われて育つことで、子供は母親に対する絶対的な信頼を抱くとともに、母親の働く姿を物心つく前から見せられ、いろいろな人と出会うことで、社会性の基礎を身に着けるといえる。今はすたれてしまった日本式の育児法である。

いま一つは、さくらの夫、博が仕事で腕にけがをした点。そ

れが縁で看護婦の京子きょうこと知り合うことになる。寅次郎はいつものように京子に引かれるわけだが、京子の参加しているコーラグループのリーダー弥太郎やたろうが、京子に恋しているのを知って、告白をするように促すのである。それが実を結ぶことで、寅次郎はまたもや失恋し、柴又をあとにすることになる。

第一五作「男はつらいよ 寅次郎相合い傘」

「寅次郎忘れな草」のヒロイン、リリーの再登場である。リリーは寿司屋の亭主と別れて、以前と同じように、酒場で歌をうたって生活している。寅さんの女版のような性格だから、堅気な生活には向いていないのである。

寅次郎は青森で兵藤ひょうとうという男と旅をしている。この男は自由を求めて家出てきたのだった。演じているのは船越英二ふねこしえいじ。僕が初めて船越を見たのは、朝ドラ『雲のじゅうたん』に登場する夢見るお殿様。兵藤のような男には適役である。そこに偶然、リリーが現れて、三人は世間のしがらみから逃れた生活を送る。駅舎で夜を過ごしたりは、若者でなければなかなかでき

ない。

日本がまだ希望に満ちていた頃、モラトリアムという言葉が流行していた。本来は金融の用語で「支払猶予」を意味するのだが、学校を卒業して社会人となるべき若者が、しばらく就職するのを猶予してもらって、旅をしたりしながら、自分とは何か考えたりすることを指した。親の方でもそれを許せる経済的な余裕があった。

ところが、寅次郎やリリーは、もう中年なのに定職に就かず、気ままな生活を送っている。兵藤という男も、そうした自由に憧れて家出したわけで、大人になりきれない人間なのである。ただ、寅次郎と兵藤、リリーとは異なる点もある。男はいつまでも甘い夢を見ているが、女は夢を見ながらも、現実を厳し

く見つめる目も持っている。甘ったれた男なんか見ていられない。そこで、リリーは寅次郎と衝突するのである。

「とらや」の人たちは、相性が抜群のリリーと寅次郎の結婚を願い、リリーもそれを承諾する。ところが、寅次郎はリリーが冗談を言っていると思ひ込む。すると、勝ち気なリリーは冗談だと偽って、「とらや」を飛び出してしまふ。一箇所いっかしよに留まれない渡り鳥なので、どんなに相性が良くても、二人で一緒に暮らすというのはどだい無理な話だと、寅次郎も悟っているのである。

第一六話「男はつらいよ 葛飾立志篇」

冒頭で順子じゆんこという女子高校生が現れ、寅次郎を父親と勘違いする。せっかく往年のアイドル、桜田淳子さくらだじゆんこを登場させたのに、その後は寅次郎と再会することもなく、手紙のやりとりで終わる。順子の母お雪のことも通り一遍の説明だけで、どうして父親と勘違いした話を持ち出したのか理解できない。

寅次郎はお雪の墓参りで、住職から学問の大切さを教えられる。柴又の「とらや」には、御前様の親戚で考古学を専攻する礼子が下宿している。学問をしたいという寅次郎に対し、歴史の家庭教師を始める。今回は礼子が寅次郎の恋する相手というわけである。

そこに、礼子の師である田所先生たどころが登場する。演じているのは小林桂樹こばやしけいじゆ。僕の頭の中では、小石川養生所こいしかわやうじやうじよを舞台とした時代劇『赤ひげ』に登場する医師、新出去定のイメージなのだ。大学教師田所の描写が、ステレオタイプである点では、「寅次郎夢枕」における岡倉の場合と同様である。ちなみに、岡倉を演じた米倉斉加年が、今回は警官役としてたびたび現れるのも気になった。

田所先生も変人として描かれ、団子を食べながら煙草を吸い、身なり構わぬ風体で、酔ってオペラの歌などうたっているが、恋愛の道には縁遠い。寅次郎に教えられて愛弟子まなでしの礼子への愛に目覚めるが、礼子に断られて寅次郎と旅をするところで幕が下りる。

何で学者を登場させると、こうもステレオタイプになってしまうのか。庶民から見た学者のイメージをなぞっているからなのか。喜劇だから必ずしもリアリズムは要求されないというのだろうか。

第一七話 「男はつらいよ 寅次郎夕焼け小焼け」

古い時代には、文人や画家が手持ちの金を持たないときは、世話になった札として書画を置いていったという。それが大家たいかの手による物だと分かって、大騒ぎになるという話である。文人や画家は身なりを構わず、自由人で世間の常識なんかどうとも思っていない。今回登場する画家池ノ内青観いけのうちせいかんも、そうした人間である。

昭和時代にはまだ、封建時代の遺風が残っていた。血筋がどうだの、あの方は世が世ならお殿様だったのだの、結婚するのに家柄が違いすぎるとか、そんなこと気にする人間がたくさんいた。現代人から見たらつまらないこだわりだが、自由な空気

の中にも古い価値観として残っていた。明治生まれの老人が、まだ活躍していた時代である。

寅次郎は酒場で青観と知り合い、気の毒な老人だと思つて「とらや」に泊まらせる。ところが、青観は宿屋と勘違いして、「とらや」の人たちに厚かましい態度を取り続ける。それが誤解だと分かったとき、ささつと描いた絵を礼として渡す。それが七万円で売れたので、青観が大家の先生だということが分かるのである。

青観のお供をして、播州龍野を旅した寅次郎は、芸者のぼたんと意気投合する。その後、上京したぼたんから、金を騙し取られたことを聞いた寅次郎は、一肌脱ぎたいと走り回ることになる。今までにない話の展開を楽しませてもらったが、それ

は配役が素晴らしかったからでもある。画家の青観を演じたのは宇野重吉。こんな深みのある、内面が表情に出ている俳優は少なくなつた。

一方、ぼたんを演じた太地喜和子は、歌麿の浮世絵に出てくるような美人、江戸情緒を感じさせる女優だったが、深夜に車が栈橋から落ちるといふ事故に巻き込まれ、五十を前にして亡くなつた。逸材が失われたことを、しばらく悔やんだものである。

第一八話「男はつらいよ 寅次郎純情詩集」

さくらと博の息子、満男の学校の産休補助教員雅子^{まさこ}先生が、「とらや」に家庭訪問にやって来る。そこに居合わせた寅次郎が演説をぶったせいで、さくらと博はほとんど相談できずに終わる、それを「とらや」の人たちになじられ、寅次郎はいつものように飛び出していく。

旅先で一座の役者に景気よくごちそうした寅次郎は、代金が払えず無銭飲食で警察の厄介^{やっかい}になる。さくらが身元引受人として信濃^{しなの}の別所温泉に迎えに行く羽目となる。男は見栄^{みえ}で生きていくようなもので、見栄を張れるうちがまだ花だが、財布と相談せずに行うところがフーテンの寅である。

「とらや」を再訪した雅子先生に、寅次郎が鼻の下を長くしている、さくらは雅子先生が寅次郎の娘ほどの年で、相手にふさわしいのは雅子先生のお母さんぐらいの年の人だと諭す。そこに、雅子先生の母、綾^{あや}が現れる。三年も入院生活を送っていた綾は、ぜひ遊びに来てほしいと寅次郎に語る。寅次郎の思いは雅子先生から、綾の方に移る。しばしば屋敷を訪問して、病弱な綾を楽しませたり、ピクニックに連れ出したりする。

ただ、綾は快癒^{かいゆ}して戻ってきたのではなく、医者にさじを投げられて、人生の最期^{さいご}を楽しむために退院したのだった。綾は寅次郎を慕いながら命を落とす。寅次郎の好きになった女性が亡くなるのは、『男はつらいよ』のシリーズで初めてである。寅次郎に身を固められては、次の作品が生まれないわけで、寅

次郎は失恋するように運命づけられている。死別というちよつと悲しい結末も、失恋のバリエーションとして選ばれたものである。

ちなみに、母の綾を演じたのは京マチ子である。『男はつらいよ』のシリーズで唯一、寅次郎を演じる渥美清より年上のヒロインだった。一方、娘の雅子先生を演じたのは檀ふみである。テレビで初めて見たのは、NHKで放送された『連想ゲーム』でだった。勘の鋭い才媛さいえんという印象だったが、それもそのはず、作家檀一雄だんかずおの長女である。父親がパリで放浪している間、極度の貧困で鶏の餌を食べたらしい。どんな経験でも、それをプラスに転換するのは、作家も女優も同じなのではないか。

第一九作「男はつらいよ 寅次郎と殿様」

このシリーズの冒頭は、寅次郎の夢で始まる。映画制作に関わったスタッフが、毎度趣向を凝らした小劇を披露ひろうする。それを見ていて、『紅白歌合戦』に出演する歌手が演じる劇を思い出した。ストーリーがどうかと言うより、誰がどの役を演じているかに、観客の関心が向いているからである。

今回、寅次郎は「鞍馬天狗」を演じている。この夢は本筋と関わりがある。寅次郎が伊予大洲いよおおすで出会う旧大洲藩の殿様は、嵐寛寿郎あらしかんじゆうろうが演じている。映画『鞍馬天狗』の俳優であり、サムライの言葉遣いをさせるには、持って来いの配役となっている。

末の息子の結婚に反対し、勘当かんどうした息子の亡き後、ぜひ息子の嫁に会って礼を言いたいという殿様の願いを、安請け合いました寅次郎が、息子の嫁鞠子まりこを探して奔走するという話である。華族制度かそくがなくなっても、元の殿様が在世していた昭和の後期、家柄や身分の違いを気にする日本人が多かった。その一方で、相手の気持ちを探ることが美德とされ、人の話を聞いた時、ドラマを見たりしてもらい泣きする人も多かった。他人に対する思いやりが残っていて、無関心と冷血さが横行する現代おうこうと比べたら、別の国のドラマでも見ている気分になる。

殿様は嫁の鞠子に、大洲に来て自分と一緒に暮らしてほしいと願う。しかも、寅次郎と再婚してほしいとまで思う。殿様の勝手な願望が、鞠子の気持ちとは無関係に、「とらや」の人たちの心を揺さぶる。現代だったら、老人の妄想だとして、ハナから無視されるだけなのに。

第二〇作「男はつらいよ 寅次郎頑張れ！」

「とらや」の二階に、電気工事作業員の良介りょうすけが下宿している。店先に現れた寅次郎を押し売りと間違え、ドタバタ劇が始まる。今回の作品は、昭和時代の雰囲気に満ちている。下宿人を置かないで、ほとんどしなくなったし、押し売りも珍しくなった。歯ブラシや石鹸を一つ千円で売りつけても、警察に捕まる危険を考えたら、割に合わないからである。

そもそも、寅次郎がやってるテキ屋てきやの口上くわじょうも、とんと見かけなくなった。あれは一種の演芸で、口車くわぐるまに乗せられ売りつけられても、大して損した気はしなかったものだ。若者同士のぎこちなくて純情な恋愛も、今の風俗からは消えてしまった。初

めのデートで、いきなり告白なんかしないし、ましてやふられたと誤解して自殺などしない。携帯電話やメールを使えばいいだけの話である。

ふられたと誤解した良介は、二階でガス自殺を図る。下宿先でそんなことするのは人でなし。下手したら、「とらや」の建物全体を吹き飛ばして、おいちゃんおばちゃんもあの世よ逝ゆき、二階だけ壊れるなんてうまくいくもんじゃやない。まあ、喜劇なんだからリアリズムであれこれ言ってもしかたがないが。

故郷こきょうの平戸島ひらどしまに戻った良介を、寅次郎は心配して訪ねていく。そこで、良介の姉、藤子に心を引かれる。両親を亡くした姉が弟を母親代わりに面倒をみるなんていうのも、年が離れた姉弟でなければ成り立たない。これもまた、昭和時代を知らなければ

ば、奇妙に映るに違いない。

良介を演じた中村雅俊は、ながむらまさとし僕が小学生の頃には、ドラマの挿入歌「ふれあい」が大ヒットしていた。今では朝ドラの『半分、青い』で、祖父役を演じる年になった。姉役の藤子を演じたのは藤村志保、NHKの大河ドラマ『軍師官兵衛』のナレーターを務めたが、独特の語り口が賛否両論となり、背骨の骨折で降板したのを覚えている。

第二一作 「男はつらいよ 寅次郎わが道をゆく」

寅次郎は肥後の温泉で、失恋ばかりしている男留吉と出会い、失恋したら潔く立ち去るべきだと諭す。失恋を繰り返す寅次郎は、先輩として失恋指南しなんをしているわけだ。留吉とかとめとかいう名前は、子だくさんな時代にはあったものだが、少子化の現代ではあり得ないだろう。

ところで、寅次郎はまたもや宿賃がなくて、さくらに九州まで届けに来てもらう。「寅次郎純情詩集」でも同じ設定があった。宿賃が払えないなら、現金書留か振り込みにしてもらえばいいだろうに、と考えてしまうところだが、わざわざ汽車賃かけて迎えに行くあたりが、昭和時代の人情を思い起こさせる。

さて、今回はさくらの旧友、奈々子ななこがヒロインである。踊子として舞台上で活躍する姿に、寅次郎は惚れてしまう。しかし、奈々子の方はあくまでもさくらの兄として、頼りに思っているだけである。奈々子は恋人と結婚して踊りをやめるか、結婚をやめて踊りを続けるかで悩んでいる。一度は諦めようとした結婚だが、恋人と再会して抱き合い、やはり結婚を選ぶことにする。その一部始終を寅次郎は、奈々子の部屋から見せつけられるのである。

この作品の魅力は、奈々子を演じた木の実ナナの踊りと歌にある。情熱的な演技と歌声に、時が経つのを忘れてしまった。僕が木の実ナナを知ったのは、まだ中学生の頃である。NHKの大河ドラマ『風と雲と虹と』で、傀儡師くぐいしの踊子として登場し

た。その二年後にこの映画が撮影されたわけである。その後、ビートたけしの少年時代を描いたドラマ『たけしくん、ハイ!』で割烹着姿かっぼうぎの母親として現れたときには、余りの変容に度肝を抜かれたが、熱演ぶりに感心したものである。

第二二作「男はつらいよ 噂の寅次郎」

木曾路きそじを旅していた寅次郎は、博の父と出会う。久し振りだったので、寅次郎も最初は気がつかない。「寅次郎恋歌」以来の再会である。旅館に誘われた寅次郎は、芸者呼んでどんちゃん騒ぎをする。人の好意にとことん甘えてしまう。天真爛漫と言えば聞こんじやくものがたりこえがいいが。ある夜、寅次郎は博の父から『今昔物語』の一話を聞かされる。

美しい妻を失った男が、亡き妻のことが忘れられず、月夜の晩に墓を掘り返し、棺を開けたところ、腐れ果てた妻の姿が現れた。それからというものの、男は生前の美しい姿を思い起こそうとすると、変わり果てた姿しか思い浮かばず、仏門に入った

という話だった。

それを聞いた寅次郎は、またもや大いに反省し、柴又に帰ってから「とらや」の人たちに、人の世の空むなしさについて語る。「寅次郎恋歌」でも博の父から、人間の本当の幸せについて諭され、幸せを象徴する童胆の花の話の話を繰り返していた。パターンとしてはほとんど同じである。

ただ、寅次郎のにわか悟りは長続きしない。「とらや」の店員となった早苗さなえを見た寅次郎は、またもや一目惚れする。早苗が夫と別れたことを知り、有頂天となってしまう。ただ、高校教師の添田そえたが早苗を慕っていることを知り、寅次郎は自ら身を引いて、いつものように旅に出る。人の世の空しさを知ったのだらうか。それが教訓とならなかったからこそ、『男はつらい

よ』のシリーズが続いたわけである。

第二三作「男はつらいよ 翔んでる寅次郎」

甥の満男が書いた作文に、おじさんがお嫁さんをもらって、お母さん（さくら）を安心させてほしいとあったのに、へそを曲げた寅次郎は、「とらや」を飛び出して北海道へと旅立つ。そこで、一人旅をするひとみと出会う。ひとみは見ず知らずの男の車に乗せられ、危うく襲われるところを寅次郎に救われる。今の北海道はどうか知らないが、誰もいない道を一人とぼとぼ歩いていた大学生の僕も、声をかけられてトラックに乗ってしまった。自分が何もなかったのは男であるおかげだろうが、ヒッチハイクなんて死語になりつつある現在と比べれば、随分のどかでいい時代だった。

話を元に戻すと、結婚するかで悩んでいたひとみに対し、寅次郎は昔話を聞かせる。病気のおとつあんの薬のために、親ほども年の離れた男のもとに嫁ぐ娘の話を、である。寅次郎が語ったのは、江戸時代の妾奉公の話みたいである。ピン트가外れているところが、いかにも寅次郎らしい。

東京に戻ったひとみは、邦男と結婚式を挙げるのだが、お色直しでウエディング・ドレスに着替えたところで、ひとみは結婚式場から逃げ出す。タクシーで向かった先は、葛飾柴又の「とらや」。ウエディング・ドレス姿のひとみが「とらや」に入っていくところを見た人々は、寅次郎にお嫁さんが来たと噂する。寅次郎自身もそんな思いがして、翔んでる気分になる。

結婚相手の邦男が「とらや」に現れ、最初はいやがっていたひとみだが、失恋のプロの寅次郎が邦男を励ますうちに、二人のわだかまりも解けていく。すべてを投げ出して家を出た邦男を見直して、ひとみは結ばれたいと思うようになる。恋心を抱いていた寅次郎は失恋した上に、二人の結婚式の仲人までする羽目となる。

ひとみを演じたのは、まだ二十代だった桃井かおり。こんな顔していたんだと懐かしく思った。不器用な話し方するところなど癖が強いのだが、化粧すると見違えるほどきれいで、話し方のぎこちなさと美しい顔がアンバランスな点も、なかなか味のある女優だった。そして、ひとみの相手役邦男を演じたのが、若かった頃の布施明である。

第二四作「男はつらいよ 寅次郎春の夢」

このシリーズはパターンが決まっている。寅次郎が旅先から戻ると、「とらや」で「悶着ひともんちやくが起きて、怒った寅次郎は飛び出していく。寅次郎が帰ってくると、目の前に美人が現れて一目惚れする。ほどなく、恋は破れてふたたびテキ屋の仕事に戻る」といったパターンである。だから、マンネリズムに陥らないように、何か新しい要素が必要なのだ。

今回はビタミン剤のセールスをしているアメリカ人、マイケルが登場する。「とらや」の人たちは「舞妓まいこさん」みたいにか呼んでいる。ビジネスがうまくいかず、ホテル代も出せないため、御前様の勧めで「とらや」に下宿するようになる。「とらや」

の人たち、とりわけさくらの親切に感激したマイケルは、さくらのことを愛するようになる。しがたない商売をしている点で、かなわぬ恋をする点で、アメリカ版の寅さんである。

一方、寅次郎は甥の満男が通う英語塾の先生、めぐみのお母さんに恋心を抱くようになる。ただ、マイケルのさくらに対する思いが詳しく表現されている分、寅次郎の恋は表面をなぞるようにしか描かれていない。決まった時間枠の中では、やむを得ないことであるが。マイケルと寅次郎が、ともに失恋したところで、マイケルはアメリカに帰郷し、寅次郎はテキ屋稼業かぎように戻っていく。

第二五作「男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花」

寅次郎と相思相愛の女、リリーが最初に登場したのは「寅次郎忘れな草」、次いで「寅次郎相合い傘」で、本作が三回目である。歌手を続けるリリーが、沖縄で倒れたという知らせを受けると、高所恐怖症の寅次郎も飛行機に乗り、ふらふらになつて那覇空港に降り立つ。

病院で寅次郎と再会したことで、リリーは生きる意欲を取り戻し、ほどなく退院することができた。民家之間借りした寅次郎とリリーは、夫婦のような生活を始める。ただ、それが日常になると、非日常的な感動も薄れていく。寅次郎が「暑い、暑い」と言つて、水族館に通つている間、リリーは仕事を探すた

めに、間借りしている家の息子、高志に車で酒場を回つてもらふ。

病み上がりのリリーを働かせたくない寅次郎は、のんびりしていると言うが、リリーは「男の世話になるのは真つ平」と答えた後、「あなたと夫婦だったら別よ」と付け加える。リリーの告白に対し、寅次郎は「お互い所帯なんか持つ柄か」と言い返す。そこに現れた高志がリリーの肩を持つので、寅次郎は「てめえ、リリーに惚れてるな」と怒鳴る。すると、リリーは怒りを爆発させて卓袱台ちやぶくだいをひっくり返す。翌日、寅次郎を置き去りにして、本土に帰つてしまう。

寅次郎は島伝いに船に乗り、三日三晩飲まず食わずで、行き倒れになつて「とらや」に担かかぎ込まれる。元気になつた頃、リ

リリーが「とらや」を訪ねてくる。今度は寅次郎の方から「おれと所帯持つか」と言うのと、リリーは照れて、「みんな真に受けろわよ」と言いつて受け流す。本当はうれしかったのに。

柴又でリリーと別れた寅次郎は、再び旅先でリリーと再会する。二人ともすごい乗りで、草津に向かつて旅を続ける。やはり二人は、旅しているからこそ、本音をぶつけ合つて意気投合できる。結婚に対する憧れはあつても、恋人同士でいる方が、素直な気持ちで相手を愛せるのである。

第二六作 「男はつらいよ 寅次郎かもめ歌」

寅次郎の妹さくらと夫の博は、アパート暮らしから、二階建の一軒家に引越す。二階には息子の満男の部屋があるが、もう一室は「お兄ちゃん部屋」だと聞いて、寅次郎は妹の心遣いに胸が熱くなる。「とらや」の二階の部屋は、下宿人に貸してあることが多いからである。いつもと違ってなごやかな感じで進んでいくが、寅次郎が差し出した新築祝いを、博が素直に受け取らなかつたことで、寅次郎はへそを曲げて「とらや」を飛び出していく。

寅次郎の向かつた先は、「江差追分^{えさしおいわけ}」で有名な北海道江差。そこで極道の仲間、常吉の計報^{ふほう}を知る。線香の一本でも上げて

やりたいと、向かった先は奥尻島である。そこには常吉の娘すみれがいた。一九八〇年（昭和五五）制作の映画で、イカの大漁に伴う奥尻島が映っている。その十三年後の北海道南西沖地震に伴う大津波で、島は姿を一変させてしまった。海岸沿いの家は流され、震災後に防潮堤で島を囲ったために、豊かな海も過去の物となったという。貴重な映像の記録でもある。

さて、常吉の娘すみれから東京に出たいと言われた寅次郎は、父親代わりになって、アルバイト先や定時制高校への編入を世話する。ところが、そこにすみれの恋人が現れて、寅次郎は娘を奪われるような寂しさを覚えるのである。

ちなみに、入学先の高校の国語教師は、かつてのおいちゃん役松村達雄が演じている。下條正巳に役を譲った後は、教諭や

教授、坊さんなどの脇役を演じている。

第二七作「男はつらいよ 浪花の恋の寅次郎」

寅次郎は夢を見る。亀を助けて竜宮城に行く、乙姫様はヒロインふみを演じる松坂慶子まつざかけいこで、踊っているタコは印刷工場のタコ社長だった。柴又に戻った寅次郎がその夢について語ると、金策に追われていた社長と言ひ合いになる。夜になつても社長が戻らないので、寅次郎は社長が早まったと思ひ込み、江戸川に探しに行く。社長を死なせたと悔いて、寅次郎はなぜか「南無阿弥陀仏なむあみだぶつ」と唱える。柴又帝釈天題経寺の檀家だんかなら「お題目」だろうに。

旅先で寅次郎は墓参りの美女と出会う。ふみという名の女性である。後日、テキ屋をやつてるところでふみと再会する。ふ

みは芸者をしていて、生き別れたままの弟がいた。妹さくらと生き別れだった寅次郎は、我が身のように感じて、ふみに弟と再会するように促す。ところが、弟はすでにこの世にないことを知る。悲しむふみを見て、寅次郎は何もしてやれない自分を腑甲斐ふがひなく思う。

真夜中に酒に酔つて、寅次郎の宿を訪ねたふみだったが、寅次郎にもたれたまま居眠りしてしまう。同室で夜を過ごすのを避けた寅次郎に、ふみは「迷惑ならそう言つてくれればいいのに」と置き手紙したまま去る。

寅次郎にとっては、美女との夢のようなひとときだった。こんな女性と親しくなれるなんてと、男なら誰でもうらやまはずだ。柴又に戻った寅次郎のもとに、芸者をやめたふみが現れる。

仕事の世話をしやりたいたいと、ぬか喜びの寅次郎。実はふみが芸者をやめたのは、対馬出身の男と所帯を持ったためだった。会いに来なければ、夢を見続けていられたのに、と寅次郎はこぼす。

僕が若かった頃、松坂慶子は絶世の美女と評判だった。この世の物とも思えない、天女が舞い降りたかと思ってしまうほどだった。ただ、ほっそりした体型をしていたから、最近のふくよかな姿しか知らなかったら、誰かと思ってしまうだろう。でも、かすれるような声を出していた当時より、今のように響く声の方が好きだな。

第二八作 「男はつらいよ 寅次郎紙風船」

人生も半ばを過ぎてから同窓会に行くと、いろいろ考えさせられるものである。子供の頃のことやよみがえるのに、顔は皆、中年のおっさん、おばさんになっている。悪い魔法にでもかけられたような気分になる。それでも、過去のことが次々と思いつき出され、懐かしさで胸がいっぱいになる。ただ、寅次郎のように同級生をいじめていた場合は、招かれざる客となる。それを感じた寅次郎は、同窓会の帰りに悪酔いして暴言を吐き、また旅に出しまう。

筑後川のほとりの宿で、寅次郎は十八の家出娘、愛子と知り合う。ぐれていた愛子は寅次郎を慕って、テキ屋のサクラを演

じたりする。その祭りの屋台で、寅次郎は同じ稼業だった常三郎の女房光枝と出会う。夫が病氣だと聞かされた寅次郎は、福岡県秋月の家まで訪ねていく。医者にさじを投げられた常三郎は、もし自分が死んだら、光枝と結婚してくれと言ひ残す。

寅次郎は愛子に付きまとわれて面白がりながらも、こんなこと続けられないと、置き去りにしてしまふ。柴又に戻った寅次郎は、光枝と再会する。常三郎が死んだことを知った寅次郎は、常三郎の言葉を思い出し、真人間になろうと就職試験を受けたりする。光枝は常三郎が死ぬ前に、寅次郎と結婚しろと言つた話を持ち出し、寅次郎の気持ちを確かめようとする。本心では所帯を持つことも考えていたのに、寅次郎は照れ隠しで否定してしまう。光枝がほっとした表情を見せたので、寅次郎はつら

い気持ちを抑え切れなくなる。

寅次郎は焼津に向かい、愛子と再会する。十八の娘では恋の対象とはならないが、「おじさん、おじさん」と慕われる寅次郎は楽しそうである。自分らしく生きているからこそ、少女に好かれているのを、寅次郎も自覚しているのである。

第二九作「男はつらいよ 寅次郎あじさいの恋」

寅次郎は京都で、陶芸家加納作次郎かのうさくじろうと知り合う。その家には女中をしているかがりがいた。夫に先立たれ、娘が一人いる身の上だったが、弟子の蒲原かんばらと結婚するはずだった。ところが、蒲原は窯かまを作るために、金持ちの女性と結婚することになる。失恋したかがりに対し、相手にどうして本音でぶつからないのかと、作次郎は叱りつける。芸術家は現実を無視して、理想を相手に押しつけることが多い。このことでかがりは女中をやめ、丹後たんごに引っ込むことになる。

かがりのことが気になった寅次郎は、会うために丹後に出向くが、帰りの船もバスも出てしまい、かがりの部屋に泊まることになる。結局、何も起こらないのだが、隣室でかがりが片づける音がしたり、寝たふりの寅次郎を見ながら、窓を閉めたり明けりを消したり、思わせぶりの演技が続く。翌日、寅次郎が帰るとき、かがりは「もう会えないのね」と洩らす。

柴又に戻った寅次郎は、恋こい煩わづらいにかかつて寝込んでいた。その演技はわざとらしい。かがりが「とらや」に会いに来て、「あじさい寺で待ってます」と言いながら、熱病にかかったように、ピンクの洗濯物を頭に引っかけたまま、通りを突き進んでいく。喜劇だと割切つても、ちよつとやり過ぎなのではないか。

かがりとのデートの日、照れくさい寅次郎は、甥の満男を無理やり連れていく。お邪魔虫を引っ張っていったのは、寅次郎

の方にためらいがあるからだろう。よそ行きになってしまい、普段の自分が出せないためである。かがりの方でも、言いたいことがたくさんあったのに言えなくなる。かがりに「優しくて面白いかったのは、旅先の寅さんだったのね」と言われてしまう。

かがりを演じたのは、いしだあゆみ。子供の頃聴いた「ブル・ライト・ヨコハマ」が頭にあつたから、歌手から女優に転向したのかと思つたが、舞台俳優としてスカウトされて芸能界に入った。最近の人にとっては、女優というイメージしかないのではないか。

第三〇作「男はつらいよ 花も嵐も寅次郎」

寅次郎は大分の湯平温泉ゆのひらで、母の遺骨を持った青年三郎と出会う。母が生前、この旅館で働いていたので、納骨前に連れてきたのだった。その話を聞いた寅次郎は感心し、母親の供養を旅館でやってやる。

その旅館には二人組の女性客が泊まっていた。納骨後に車を運転していた三郎は、二人組と一緒だった寅次郎と再会を果たす。四人でサファリパークで遊んでいると、ヨハンシュトラウスの「春の声」が聞こえてくる。何だかどこかであった設定だと思つたら、第九作の「柴又慕情」で歌子たちが、寅次郎と交歓する場面でも、流れていた音楽だった。三郎は二人のうちの

螢子が好きになり、別れ際に「付き合ってくれませんか」とプロポーズする。

三郎と柴又に戻った寅次郎は、女性とうまく口がきけない三郎に恋愛指南をし、螢子との仲を取り持とうとする。動物園の飼育員をしている三郎は、デート中にチンパンジーの話しかできないい朴訥な青年だった。恋愛指南を買って出る点では、「寅次郎頑張れ！」の良介の場合と同じである。最後は三郎と螢子は結ばれる。二人の相談に乗りながらも、螢子を可愛がっていた寅次郎は、「用なし」になったと旅に出ることになる。

三郎を演じたのは、ジュリーと呼ばれた若き日の沢田研二。さわだけんじ確かに色気のある二枚目で、今の女性に人気がある子供っぽい優男やさおとことは違う。僕が通っていた高校の教室には、「ス・ト・リ

・ツ・パ・ー」を歌っているポスターが貼られていた。レースのついた派手な衣装も、若者の心をとらえていた。

螢子を演じたのは、沢田と結婚した田中裕子。たなかゆうここの映画の撮影後、朝ドラの『おしん』に主役として抜擢ぼつてきされ、お茶の間に広く愛されるようになった。若い頃はこんなかわいい顔していたんだなと懐かしく思った。

第三一作「男はつらいよ 旅と女と寅次郎」

歌手や俳優は人もうらやむ職業だが、本人にはつらいことも多いという。デビュー当初はろくに給料が払われず、ひとたびヒットすれば、過密なスケジュールを入れられて、自分の時間が持てなくなる。親の死に目にも合わせてもらえない。心に傷を負っても休めない。

演歌歌手の京はるみは、失恋したことや仕事に疲れ果てていたことで、シヨをすつぽかして逃げ出してしまふ。事務所には「さがさないでね」と書き置きを残して。サングラスをかけて人目につかぬようにして。新潟の海岸で寅次郎と出会い、漁船に乗って佐渡に渡ってしまふ。

寅次郎との束つかの間の休息に、はるみの心は癒いやされていく。シヨをすつぽかしたことを悔やみながらも、人間らしい気持ちを取り戻し、海岸で自慢の美声を披露する。そこにプロダクションの社長らが追いかけてくる。すんでのところで漁船に乗り込み、小木おぎの港に逃げ出すが、結局見つかってしまう。寅次郎との思い出を大切にして、はるみは芸能生活に戻っていく。

柴又に戻った寅次郎は、魂が抜かれたような放心状態に陥る。その頃、若者に人気があつたウオークマンを手に取り、金も払わずに持っていつてしまふ。聴いているのは京はるみの歌である。いかにも昭和の終わり頃の風俗で、ウオークマンも当時は携帯用のラジカセだった。商店が開店すると、チンドン屋が町を練り歩いていた。

京はるみは柴又のとらやを訪れ、寅次郎と再会する。元気になった姿に安心するが、はるみが失恋した相手とやり直すと聞いて、寅次郎は心の底で思っていた人を失った気がして、またテキ屋稼業の旅に出る。

京はるみは、言うまでもなく、演歌歌手都^{みやこ}はるみのものである。この映画を撮影した翌年、「普通のおばさんになりたい」と引退を表明する。五年後に復帰するわけだが、その間にはつらい思いもしたらしい。都はるみのファンだった作家中上健次^{なかがみけんじ}に、歌手生活がいやになったことを話すと、「ばかやろう」と怒鳴られたという。「お前な、お前の歌で心を動かされる人がいっぱいいるんだ。それをなんだ、恥ずかしいなんて」と。この映画を見ていると、気は短いが本音で語る寅次郎と、中上健

次の姿が重なってしまう。

第三二作「男はつらいよ 口笛を吹く寅次郎」

アマゾン・プライムの会員になったので、どんなビデオが見られるか調べたら、『男はつらいよ』の全篇が登録されていた。フーテンの寅さんの映画は、今までに数本見てきた。日本語教育の教科書に、「寅次郎恋歌」のシナリオの一部が収録されいて、外国人の学生と一緒に見て大笑いしたものである。

今回見たのは「口笛を吹く寅次郎」。制作年は一九八三年（昭和五八）だから、僕がちょうど大学生の頃。実はそのとき、見たいなと思いつつ、そのままになっていた。寅次郎が袈裟けさを着て、坊さんの真似事をやると聞いていたので。「寅次郎恋歌」では、寅次郎の妹、さくらの夫である博の父に、平凡な日常生

活の中にこそ、本当の幸せがあると諭され、寅次郎は真面目に生きようと思ったわけだが、今回は博の父の三回忌で、寅次郎が備中高梁びつちゅうたかはしにある博の父の墓参りをしたとき、酒に酔った住職と娘の朋子に出会ってしまう。

二日酔いで体調の悪い住職に代わって、寅次郎が法事を行い、法話と称して馬鹿話を披露し、檀家の人たちを大笑いさせてしまう。寅次郎は博の父の法事でも、住職に付き従って袈裟姿で登場し、妹さくらは生きた心地がしない。

今回は娘の朋子ともこと寅次郎がいい仲になり、婿養子むことなるために、柴又帝釈天で僧侶の修行を願ひ出るが、三日坊主で終わってしまう。朋子が柴又にやってくるが、寅次郎は本心を言えぬままで幕切れとなる。寅次郎の失恋で終わる毎度のパターンで

ある。朋子を演じたのは竹下景子。竹下は「知床慕情」ではりん子、「寅次郎心の旅路」では久美子として登場する。住職を演じたのは、二代目おいちゃんだった松村達雄。

結末はいつも同じなのに、『男はつらいよ』を見ていて楽しいのは、寅次郎と妹さくら、「とらや」のおいちゃん、おぼちゃん、博の働く工場の社長など、家族と再会したような懐かしさを感じるからだろう。寅次郎の語りの名調子も、下町の義理人情も、思いを直接表現できないもどかしさも、個人商店が軒を連ねた街並みも、すべて昭和時代の風俗を伝えている。

その頃青春のまっただ中にいた自分に、重ね合わせていたのだろう。人生にはいろいろなことがある。大切なのは、人と人

の心のつながりだということに、気づかせてくれるのである。一日中、スマホの画面を見続ける現代人を思うと、世の中が便利になった分、生き生きとした人とのつながりも薄れ、うそ寒い思いをせずにはいられない。

第三三作「男はつらいよ 夜霧にむせぶ寅次郎」

この作品で久し振りに、寅次郎の舎弟川又登が登場する。テキ屋稼業から足を洗って、今は盛岡で女房と食堂をやっている。登は再会を喜んで、女房に酒や魚を買ってこい、店を閉めろと言いが、寅次郎は登に対し、堅気になったんだから、そんなことでどうすると諭して、すぐに店を出てしまおう。寅次郎の後ろ姿は寂しげである。

釧路くしろに出た寅次郎は、理容師の風子ふうこと出会う。「フーテンの風子」のあだ名を持つ風子は、寅次郎が「フーテンの寅」と呼ばれていることを知ると意気投合する。この二人の関係は、寅次郎とリリーの関係に似ている。ただ、大きな違いは、風子が

かなり年下なので、恋人同士にはなれないことと、風子にはサーカスでバイクの曲芸をやってるトニーという男がついている点である。

風子はいったんは根室で理容師となるが、寅次郎とともに旅に出たいと言い出す。それに対して、はじめに働いて所帯を持ってと風子を諭す。寅次郎は根室ねむろを後にするが、風子はトニーと恋仲になってしまふ。

柴又に戻った寅次郎のもとに、トニーが訪ねてくる。風子が病気だから会ってやってくれ、と言いに来たのだった。寅次郎は自墮落じだらくなトニーに、風子から手を引けと言う。風子は「とらや」で生活することになったが、寅次郎の干渉を知って、「私とトニーのことなのよ」と言って「とらや」を飛び出していく。

結局、風子はまじめな青年と結婚するのだが、後味としてはあまり良くない。トニーのことが表面的にしか描かれていない。いつもの寅次郎なら、トニーに対してもなにがしかのケアがありそうなものだが、今回は風子との関係を切らせて放置している。まじめな青年との結婚式も、取って付けたような感じだし、結末の熊騒動も蛇足だろう。

第三四作「男はつらいよ 寅次郎真実一路」

金がないのに居酒屋で飲んでしまった寅次郎は、たまたま居合わせた証券会社の課長健吉けんきちに、酒代をおごってもらう。米倉斉加年は以前、東大助教授や警官として登場したはずだが、今回はモーレッツ社員の役である。午前様になっても、翌日は六時に家を出る。酒を飲んだからといって、決して遅刻してはならない。

家族のために、自然の残る茨城県いばらきけんの牛久沼うしくぬまに家を建てたのだろう。農村の雰囲気ふんぎが漂う風景と、新興住宅地が隣り合わせている。長期離通勤は「痛勤」という造語を生んだ。バブル経済がはじける前、昇る日は沈まないと思われた日本経済華やかな

りし頃、仕事のためなら、家族とほとんど話ができなくても当たり前前、海外から「エコノミック・アニマル」と揶揄されながらも、必死に働くことが美德とされていた時代である。

酒をおごってもらった礼に、健吉の会社に現れた寅次郎は、夜九時まで待合室で待たされ、ソファアで居眠りしている。ようやく仕事の終わった健吉と寅次郎は居酒屋に行き、泥酔して牛久沼の自宅に向かう。翌朝、寝坊した寅次郎は、健吉の妻ふじ子と顔を合わせ、美しさに見とれながらも、人妻であることを考え、あわてて朝食もとらずに出て行く。

仕事に疲れ果てた健吉が、行方不明になった知らせを受けた寅次郎は、ふじ子とともに健吉の故郷鹿兒島かごしまに向かう。開聞岳かいもんだけが見える辺りで、生死不明の健吉が愛した地を、順に巡ってい

くのである。しかし、健吉の消息はつかめず、このまま健吉が現れなければという妄想を抱いた寅次郎は、自身の醜みにくさに煩悶する。そのまま旅に出ようとしたところに、ようやく健吉が現れ、牛久沼のふじ子のもとにタクシーで届けるのである。

ふじ子を演じたのは、大原麗子おおはられいこである。大原はNHKの大河ドラマによく出演していた。『春日局かすがのつぼね』で主人公のおふくを好演した。僕がよく記憶しているのは、『徳川慶喜とくがわよしのぶ』で新門辰五郎しんもんたつごろうの妻れんと、ナレーションを担当したことで、粋な女性の江戸弁による語り口が耳に残っている。そう言えば、ずいぶんテレビで見えていないなと思ったら、二〇〇九年（平成二一）に亡くなった。自宅で死亡しているのが発見されたという。脳内出血だったらしいが、寂しい最期となった。

第三五作「男はつらいよ 寅次郎恋愛塾」

寅次郎は仲間と、五島の青砂ヶ浦に寄った。岸辺で老婆が倒れたので、家に連れて行ってやる。その夜、老婆のうちで酒を飲み、歌って踊っての夜を過ごす。老婆は体調が急変し、寅次郎に感謝しながら息を引き取る。五島はキリシタンの島であり、老婆の葬儀もカトリックの教会で行われる。

そこに孫娘の若菜わかなが、東京から戻ってくる。若菜の母は若い男に騙され、妊娠させられて若菜を生んだが、島の人に後ろ指をさされて自殺した。カトリックでは自殺は禁止されているから、老婆にとつては悲しみに追い打ちをかけられたことになる。そうした暗い過去を、老婆の孫娘も背負ってきたのである。

東京に帰ってきた若菜を、寅次郎は訪ねていく。印刷会社をやめてしまった若菜に、寅次郎は就職の世話までしてやる。同僚パートには、司法試験を目指す民夫という青年がいた。密かに若菜のことを慕っていたので、寅次郎は民夫に恋愛指南を言う。「寅次郎頑張れ！」の良介や、「花も嵐も寅次郎」の三郎に行ったように。

しかも、失恋したと思ひ込み、民夫が自殺未遂するところなど、良介の場合とそっくりである。「寅次郎頑張れ」の舞台は平戸だったが、今回は五島の中なかどおり通島である。ともにカトリックの信仰が根づいており、最後に若い二人が結ばれる点も同じである。

恋愛指南をする場合、寅次郎は相手の女性と一定の距離を保

ち、首ったけにはならない。その点で、喜劇的な要素が薄いと
言える。ふられて寂しく柴又を去る場面が、今回は見られない
のである。

第三六作「男はつらいよ 柴又より愛をこめて」

印刷工場の社長の娘、あけみが家出してしまふ。下田しもだにいるらしいことが分かると、寅次郎が連れ戻しに行くことになった。あけみは寅次郎の飾らない、率直なところが好きなのだろう。すぐには帰りがらないので、寅次郎はあけみの望むまま、式根島しきねじまへの船に乗り込む。小学校の同窓会で帰郷する若者たちと意気投合した寅次郎は、あけみのことはほったらかしで、若者たちと車に乗り込んでしまふ。

港に取り残されたあけみは、旅館をやっている純情な青年、茂しげるに好感を抱くようになる。一方、寅次郎は同窓会で同席した真知子まちこ先生と親しくなる。真知子は寅次郎に、教師という仕

事の喜びと切なさを語る。生徒を学校から送り出すことは、教師にとつて喜びであるとともに別れでもある。子供たちは外の世界で人生を歩んでいくのに、教師は教える子供が代わっても、学校に留まり続ける。こんなことを繰り返しながら、教師は年を取ってしまふ。耳を傾けるうちに、寅次郎は真知子に心引かれていく。

一方、あけみは茂に求婚されて、夢のような気分から目が覚める。「あたし人妻なの！」と叫んで逃げ去る、純情な青年の心を傷つけてしまったのを悔いて。あけみのつらい思いを聞かされた寅次郎は、真知子への思いを振り払って、式根島を去ることを決意する。

その後、真知子は柴又に現れ、寅次郎の恋心はよみがえるの

だが。真知子を演じたのは栗原小巻くりはらこまきである。僕が初めて栗原を見たのは、呂宋助左衛門るそんすけざえもんを主人公にした、NHKの大河ドラマ『黄金の日々』おうごんにおいてだった。栗原は助左衛門の憧れの女性美緒を演じた。中学生だった僕は、子供ながらも、ボーイッシュな感じの美人だと思ったものだ。

第三七作「男はつらいよ 幸福の青い鳥」

第八作「寅次郎恋歌」の冒頭と結末に、旅役者中村菊之丞なかむらきくのじょうの一座が出てくる。座長の娘はおおぞらさゆり大空小百合の芸名で演じていた。寅次郎は傘で見送った小百合に景気よく紙幣を渡すが、千円のもりが五千円札だったので、宿代がなくなるといふ落ちがついていた。

筑豊ちくほうを旅した寅次郎は、座長の死を聞き、かつて小百合の名で芸人をしていた美保みほと再会する。別れ際に美保は「青い鳥がほしい」と洩らす。旅館で芸者のような仕事をするのに飽き足らずにいたのだ。寅次郎は美保に、東京に出てくるようなことがあったら、柴又に寄るように言い残す。

上京した美保は、チンピラにからまれる。それを救ったのが、看板屋の健吾けんごだった。美保が発熱しているのを知り、自分の部屋に呼んで面倒を見る。健吾は画家志望の青年で、プライドが高く、屈折した心の持ち主だった。親切にしたのも、下心したこころがなかったわけではない。気になりつつも、美保は置き手紙をして部屋を去る。

「とらや」を訪れた美保に、寅次郎は二階の部屋を提供し、就職先も紹介してやる。美保に対して「一点のやましきもない」と宣言する寅次郎は、お嬢さん探しまで始める。だが、美保は健吾のことが忘れられず、看板屋を訪ねていた。賞に落選してスランプ状態の健吾は、そばにいてほしくて、美保をベッドに押し倒す。愛情表現が不器用な健吾に、ショックを受けた美保

は部屋を出て行く。

屈折した画家志望の青年を演じたのは、長^{なが}淵^{ぶち}剛である。最近の写真しか見ていなかったから、若い頃はこんな顔していたんだと思った。感情の起伏が激しいが、根はいい奴で、調子に乗ってハーモニカ吹いてるところが、さすがに決まっていた。

「乾杯」を歌う歌手ぐらいにしか思っていなかったが、魅力ある演技には感服した。

美保を演じたのは、志^し穂^ほ美^み悦^{えつ}子^こである。この作品を撮影した翌年の一九八七年（昭和六二）に長淵剛と結婚した。実は、僕は志穂美悦子を目の前で見たことがある。中学三年の時に、『ゲーム ホントにホント?』というクイズ番組に出たとき、志穂美悦子はレギュラーとして出演していた。NHKのスタジオに

入ったことは、その時以外にはない。

第三八作「男はつらいよ 知床慕情」

「とらや」のおいちゃんが入院しているところに、寅次郎は帰ってくる。休業していた「とらや」を開店することになり、寅次郎は店で働くことになったが、堅気な仕事には向かない性分、怒ったおばちゃん「とらや」をやめようと言い出したのを漏れ聞いて、寅次郎は肩を落として柴又を去る。

寅次郎が向かったのは知床だった。ヒツチハイクで獣医の順吉じゆんきちの車に乗せてもらい、そのまま、居候いそうろうすることになる。妻を失った順吉には一人娘のりん子がいた。反対を押し切った結婚に失敗し、故郷の知床に戻ってきたのだが、父と娘で顔をつきあわせるのは気まずい。寅次郎が間に立って、二人の

仲を取り持つことになる。

順吉の身の回りの世話は、スナック「はまなす」のママ悦子がやっていた。二人は突っ慳貪けんどんな会話しかないのだが、実は惚れ合っているのではないかと、寅次郎はにらんでいる。そこで今度は、順吉と悦子を結びせよとするのが。

順吉を演じたのは三船敏郎みつふねとしろうである。黒澤明の映画『羅生門』らしやうもんや『七人の侍』で好演した俳優である。大正生まれの三船が演じた順吉は、頑固一徹でかわいい娘りん子に対しても、本心を隠したままつらく当たる。大正生まれと言えば、第二次世界大戦で戦地に送られた世代である。頑固さにかけては、続く昭和ひとけた一桁の父親よりまさっていた。

それを見ていて、中国大陸で軍医をしていて、終戦後に個人

病院を開いていた一人の医師のことを思い出した。父親に逆らって画家を目指した娘を決して許そうとせず、母親は娘と密会することしかできなかった。順吉のりん子に対する態度を見て、連想せずにはいられなかった。予科練に入隊していた僕の父も、頑固さでは相当なものだったが、娘である僕の妹には甘かった。りん子を演じていたのは、僕の世代にはアイドル的存在だった竹下景子である。「口笛を吹く寅次郎」では、松村達雄が演じた住職の娘朋子役だった。清冽な印象を持っていた竹下が、朝ドラの『わろてんか』でついに祖母役で登場したのを見て、時の流れというものを感じさせられた。

第三九作 「男はつらいよ 寅次郎物語」

「とらや」に秀吉ひでよしという少年が尋ねてくる。父親はテキ屋で、自分が死んだら寅次郎を頼るようにと言い残した。「飲む、打つ、買う」のヤクザ者で、怒り出すと女房の髪の毛をつかんで引きずり回す。それに耐えかねて、秀吉の母ふでは蒸発していた。

寅次郎は少年を連れて、母ふでを捜す旅に出る。和歌山にはすでにおらず、吉野の宿に泊まったところで、少年は高熱を出す。隣室にいた隆子たかこは親身になって看病してくれる。隆子は寅次郎のことを父親だと思って「お父さん」と呼ぶと、寅次郎は隆子のことを「母さん」と呼ぶ。

少年の熱は下がり、寅次郎は少年と隆子連れ、金峯山寺に参拝する。人目にはまるで家族のようである。擬似的な夫婦、親子に見える。寅次郎は隆子と少年二人で暮らす家庭を夢見る。寅次郎と隆子は心が通じるようになるが、これはあくまでも少年が結びつけたもので、本当は寅次郎の子ですらない。それを寅次郎も隆子も知っており、後ろ髪を引かれながらもきつぱりと別れる。

今回の物語は、母親ふでを捜す旅の途中で、袖すり合うも多生の縁のような、心温まるエピソードが展開するところに特徴がある。他人の子供なのに、なぜ隆子が親身となったか、それは隆子が子供を墮ろしていたからという種明かしがされる。少年とふでが志摩で再会する場面では、すでに物語のピークは過ぎ

ており、寅次郎は別れを惜しむことなく柴又に戻る。

隆子を演じたのは秋吉久美子である。僕が初めて知ったのは、NHKの大河ドラマ『花神』においてだった。高杉晋作の妾おうのを演じていた。「うち、あほやさかい」と酔って乱れた感じが、妙に艶っぽかったのを覚えている。その記憶があるから、母性本能を見せた今回の演技が新鮮に思われた。

第四〇作「男はつらいよ 寅次郎サラダ記念日」

信州小諸こもろを旅した寅次郎は、人なつっこい老婆と親しくなり、一晚泊してもらうことになる。翌朝、女医の真知子がやってきて、老婆を入院させようとする。老婆はこの家で死にたいと言うが、寅次郎に説得されて入院する。

女医の真知子は、山好きの夫を遭難そうなんで失い、息子を東京の母に預けて、一人暮らしをしていた。そこに姪ゆきの由紀がやって来る。由紀は早稲田わせだ大学に通う学生で、寅次郎と真知子を結びつけたいと思っている。

柴又に戻った寅次郎は、由紀が通う早稲田大学の授業に出て、勝手な演説をぶちはじめる。学生の爆笑で講義は台無しになっ

てしまう。今とは違って、部外者が警備員につまみ出されることもなかった。教師も学生もゆったりしていて、自由な空気がある頃にはあった。

今回のタイトルは、俵万智たわらまちの短歌集『サラダ記念日』にちなんでいる。どうやら、由紀を俵万智になぞらえているらしい。ただ、寅次郎の恋物語としては、今一つ物足りない。女医の真知子とのからみが弱い気がする。互いに好意を抱いている程度である。

大きな変更点としては、さくらが団子屋を切り回すようになり、店の名前も「くるまや」に変わっていること。モデルとなった団子屋が「とらや」と改名したので、山田洋次監督が不快感を示して変更したらしい。

僕にとつては、真知子や由紀よりも、最初に登場した老婆の方が味があつて良かった。鈴木光枝はいかにも、おばあちゃんといった感じで、いつまで経つても若作りの老女が多い今の時代には、とても懐かしい気がした。

あと、寅次郎が甥の満男に対し、早稲田大学を受験しろと言つている場面を見て、今は亡き父が、僕の従兄と結婚した早稲田の女学生に「どうしたら早稲田大学に入れるか、よく話を聞いておけ」と言つたのを思い出した。

第四一作「男はつらいよ 寅次郎心の旅路」

宮城みやぎのローカル線に乗つていた寅次郎は、列車で自殺未遂した坂口と知り合い親しくなる。男は心の病を抱えており、寅次郎について回るようになる。やりたいことをやれと励ますと、オーストリアのウィーンに旅行するので、寅次郎についてきてほしいという。

気の進まぬまま、坂口とともにウィーンに旅立つた寅次郎だが、どう見ても場違いで居場所がない。納豆なっとうと味噌汁でご飯を食べたいのに、パンとワインナーでは食欲も湧かない。坂口とはぐれた寅次郎は、バスガイドをしている久美子と出会う。

海外が舞台になるのは初めてである。ウィーンの街の雰囲気

は悪くないのだが、寅次郎がつまらなそうにしているの、見ている方も退屈してしまう。こちらまで時間を持て余してしまうのだ。坂口とは別行動をとり、久美子の悩みを聞いてやった寅次郎は、故郷の岐阜ぎぶに戻るように勧める。いったんは帰国を決意した久美子だったが、そこにオーストリア人の恋人が現れて。

寅次郎が元気ない。この頃から渥美清は体調を崩しており、毎度恒例こうれいだった派手なけんかもなくなり、威勢良く啖呵を切ることもなくなった。そういえば、前回の『寅次郎サラダ記念日』から、冒頭の夢物語もなくなっていた。ヒロインの久美子を演じたのは竹下景子。「口笛を吹く寅次郎」では住職の娘朋子を、「知床慕情」では獣医の娘りん子を演じていた。

第四二作「男はつらいよ ぼくの伯父さん」

今回は寅次郎の甥、満男を中心に物語が展開する。大学に落ちて予備校生になり、いつもいらいらして、父親の博や母親のさくらと衝突している。そこで、伯父の寅次郎が満男の話を聞いてやることになる。

寅次郎はさばけた男なので、若者の気持ちが分かるだろうというのだが、案の定、満男に酒を飲ませて本音を言わせる。満男は転校した下級生の泉いずみに恋していたのだった。泥酔して「くるまや」に戻ると、怒った博は満男を平手打ちにする。寅次郎も面白くなくなり、旅に出してしまう。

高校を出れば一人前、未成年でも平気で酒を飲んでいた時代

である。四月の中旬ともなれば、駅前歩道には泥酔した新生が多数横たわっていた。そう言えば、床屋のおじさんに勧められて初めて煙草たばこを吸ったのは、まだ高校生の時だった。僕が在学していた高校は、トイレを見つけないのが簡単だった。煙が出ていた所がトイレだったから。外で父と酒を飲んだのもその頃だった。予備校生の時には泥酔して帰ったのだが、父には何も言われなかった。自分の若い頃を思い出したんだろう。予科練から帰還してからは、随分荒れていたらしいから。普段はとも怖い人だったが、若者の心はよく分かっていた。何だか性格は寅次郎みたいだったな。

余談が長くなってしまった。満男は家出して、泉に会いに名古屋へ行く。さらに、泉の下宿先の佐賀にまで足を伸ばす。泉

と再会した後、旅館に行く部屋が空いていない。相部屋することになり、そこにいたのが寅次郎だった。喜劇でなければあり得ない設定だが、寅次郎の満男に対する恋愛塾が始まる。満男にせがまれて、寅次郎も泉の下宿先に押しかけていく。

ちやうどバブル経済が崩壊する前で、親にも経済的な余裕があったし、子供の方でも青春を謳歌おうかする自由があった。学費のためにアルバイトをし、就職しても奨学金の借金が山とある現在の学生とは違って、随分恵まれていた時代だった。

第四三作「男はつらいよ 寅次郎の休日」

冒頭の寅次郎の夢が復活した。寅次郎が公家くげとなつて月見をしていると、そこに旅たびの女性にょしやうが訪ねてくる。もう分かつただらう？ 女の名は桜式部さくらしきぶという。生き別れていた兄と妹の再会というお決まりのパターンではあるが、常連にとつては楽しみの一つである。

今回は「ぼくの伯父さん」の続きで、実質的な主人公は、甥の満男に移っている。満男の後輩泉が、別居中の父親を訪ねて東京にやってくる。名古屋で母親と暮らしていたのだが、浮気の相手と別れて家族の許に戻ってきてほしいと、父親に告げるためだった。ところが、父親は大分ひたの日田に引越していた。

名古屋に戻るはずの泉は日田に行くと言い出し、東京駅に見送りに来た満男も、心配で新幹線に乗ってしまう。

ところが、日田のうちを訪ねると、父親は薬剤師の女と幸せそうに暮らしていた。別れて母親の所に戻ってほしいと、泉は言い出せず、衝動的に立ち去ってしまう。途方に暮れていた満男と泉は、寅次郎と泉の母親礼子れいことばったり出会う。寅次郎と礼子は、若い二人の身を案じて、日田にやって来たのだった。そのまま温泉旅館に行き、四人は家族のような一夜を過ごす。水商売という職業柄色っぽい泉の母親に、寅次郎は心を動かされてしまう。ここに至つてようやく、寅次郎らしさが出てくるのだが。

満男は大学生になっているが、精神的に自立したくて、母親

のさくらの世話を煙たがっている。思わず反抗的な態度を取って、父親の博と衝突している。思い返せば、僕にもそういう時期があった。あれこれと指示する母親に、ロボット扱いするなと毒づいたことも。家族と旅行するのなんか、真まつ平びらごめんと思ったりした。

すでに新幹線が博はかた多たまで開業していたが、寝台特急のブルートレインは健在だった。寅次郎と泉の母親礼子が、ビールを飲みながら語らう場面が出てきたが、のんびり夜行で旅する間に、人生について考えたり語り合ったりできたのも、夜通しの移動の時間があったからである。飛行機の方が速くて割安な昨さつ今こんだが、いきなり現地に着陸するのでは、旅情も何もあつたもんじゃない。

第四四作「男はつらいよ 寅次郎の告白」

このシリーズは車寅次郎の旅と女、恋がテーマだったが、渥美清の体調不良で、寅次郎の出演場面を減らさざるを得ず、甥の満男とガールフレンド泉の恋物語を、主たるテーマに据すえることになった。そのために、連作の形で各回のエピソードが緩い形で結ばれていたのが、連続ドラマに近い形を取るようになった。

各回だけ見ても面白いようにするには、単独で分かる内容にしなければならぬ。物語の展開が満男中心になったからといって、満男の恋人を毎回代えるわけにもいかない。とにかく次作を見たいというファンの要請と、それでは新たな観客を呼び

こめないというジレンマに陥っているというわけだ。

今回は満男と泉の恋物語第三弾である。泉の母親礼子に恋人ができて、反発した泉が家出し、鳥取砂丘とっとりを見て「寂しい海が私の寂しさを吸い取ってくれるようです」という葉書を送ってよこす。心配した満男があわてて鳥取に向かう。再会できた二人は、寅次郎に連れられて、馴染みの料理屋に連れていかれる。そこは昔、寅次郎が恋した女、聖子せいこの店だった。

恋敵こいがたきだった板前が死んで、未亡人となった聖子に迫られるという設定である。寅次郎はすぐ手に入る女性が近づいてくると、自分の方から逃げ出してしまう。高嶺たかねの花には夢中になるのはどうか。満男は泉に対して寅次郎の恋愛観を解き明かす。ただ、今さら聞かされるまでもない話で、シリーズを続け

るには寅次郎に所帯を持たせるわけにはいかないのである。

第四五作「男はつらいよ 寅次郎の青春」

満男のガールフレンド泉が、同級生の結婚式で宮崎に向かう。一方、油津あぶらつで床屋を営む蝶子ちようこと親しくなった寅次郎は、髪結かみゆいの亭主のように居候している。蝶子と城見物をしているところでは泉と出会い、階段を踏み外して足をけがしてしまう。その知らせに柴又は大騒ぎとなり、満男は飛行機に乗って宮崎に向かう。ただ、寅次郎のことが心配というより、泉と会いたかったのが本音のようである。

蝶子の家には、船乗りの弟竜介が帰宅していた。満男は寅次郎のもとに向かうが、泉が竜介と親しく話しているのが面白くない。竜介に嫉妬しているのである。その誤解が解けると、急

に無邪気に喜んでいるところを見ると、青春しているのは満男の方だということが分かる。

一方、寅次郎は蝶子に好感を抱いているものの、かつてのように夢中になることもなく、世話になったことに礼を言い、満男たちと柴又に帰ると蝶子に告げる。すると、軽い気持ちで同情されていたのかと、蝶子は怒り出してしまふ。寅次郎としては、青春は懐かしむものとなっており、満男を通して遠くから眺めた方がいいのだろう。

柴又にまた、いつもの日常が戻ろうとしていた。満男も大学生活を再開するわけだが、泉の母礼子が手術することになる。泉は勤めていたレコード店を辞め、母親の住む名古屋に戻ることにする。満男は引き裂かれる思いで、東京駅に行つて別れを

惜しむのだが。

従来の話のパターンでは、柴又に戻ってきた寅次郎が大げんかして飛び出し、旅先でヒロインと出会うという形を取るのだが、今回は寅次郎の恋愛が一段落するまで戻らない。タイトルは「寅次郎の青春」とあるが、実際は「満男の青春」といった方がいいのではないか。寅次郎はもう人生を達観たっかんしたような境地きょうちにあり、恋愛に関しても淡泊たんぱくになっていようである。

第四六作 「男はつらいよ 寅次郎の縁談」

就職活動で一向に内定が取れない満男は、父親の博とけんかして家出してしまふ。行く当てもなく乗った列車は高松行き。すでに瀬戸大橋線が開業しており、たどり着いたのは瀬戸内の琴島ことしまという小島である。かつて船乗りだった老人と、愛人に産ませた娘むすめ葉子はようこが暮らす家だった。

満男はその家に世話になりながら、漁師の船に乗ったり、畑仕事を手伝ったりして生活している。今では診療所の看護婦あや巫矢あやに、恋心を抱くまでになっている。満男には泉という恋人がいたはずだが、今では島の娘とよろしくやっっているのである。何だが恋をしては破れる寅次郎に似てきている。

家出した満男を迎えに来た寅次郎だが、船が欠航して居座る羽目になる。病み上がりの葉子と親しくなり、金刀比羅宮や栗林公園へ観光に出かける仲になっている。葉子と寅次郎の心の触れ合いが前面に出ており、従来のシリーズに似た印象が感じられるのだ。

本作は「寅次郎の縁談」とあるが、寅次郎に縁談話があるわけではない。いつものように恋をして、また別れるというパターンである。ただ、久し振りに元気のいい寅次郎を見たという気がする。恋をすると人間は生き生きするものだ。寅次郎は葉子に好かれ、自ら身を引いていくのだが、二人の別れ方が自然で、ともに心が傷つかない点が大人の恋という感じがする。

また、屈折した満男が心の傷を癒していく様子も、見ている

すがすがしい。島を去る満男に悲しむ亜矢も、正月には新しい恋人を作っている。「満男、おまえはふられたぞ。ざまを見ろ」と寅次郎は言うのだが、甥の満男を見守るまなざしは優しい。

久し振りに快作を見たという気がした。見ているこちらも、さわやかな気分となった。それは葉子を演じた松坂慶子の魅力にもよるところが大きい。「浪花の恋の寅次郎」以来の出演だが、あんなに美しいのに、裏表うらおもてがなく率直に物を言う姿が、男性の心をとらえて離さない。

第四七作「男はつらいよ 拜啓車寅次郎様」

満男は靴会社のセールスマンをやっている。仕事に身が入らないと、専務にとがめられている。そこで、柴又に帰郷した寅次郎が、物を売るためのコツを満男に伝授する。翌日、寅次郎は満男の会社に挨拶に行くと言い張り、おいちゃんが大げんかして飛び出したと、さくらは電話で満男に伝える。大げんかが一種の見せ場だったはずだが、それが実演されないのは、寅次郎役の渥美清の癌がんが肺に転移し、ドクターストップがかかっていたためだという。

そのせいか、今回の寅次郎は台詞せりふの数も少なく、威勢よい演技も余り見られない。淡々と演じている感じである。写真が趣

味の典子のりこと出会い、湖面を見つめながら夫婦というものについて語り合うのだが、近江長浜おうみながはまの曳山ひきやま祭りに出かけようとすると、ここで、典子の夫が現れたために、中途半端な感じて二人の関係も終わってしまう。

代わりに活躍するのが甥の満男で、先輩の信夫のぶおに呼ばれて長浜に遊びに行く。そこで、信夫の妹菜穂なほと親しくなり、互いに引かれるようになる。ただ、満男には泉という恋人がいたはずである。けんか別れしたわけではないのに、泉とは音信不通になっっているようで、その理由も明らかにされていない。前回は瀬戸内の琴島で垂矢に恋をし、今度は菜穂に引かれている。失恋を繰り返す寅次郎の後継を、満男は託されているかのようである。

それにしても、渥美清の精神力には感服する。役者は親の死に目にも会えない仕事だ、と言われるが、病気になるつてもゆくり養生することすらできない。若い頃に結核を患い、肺の片方を失いながらも演技を続け、肝臓の癌が残された肺に転移した後も、医者への忠告を退けて出演を引き受けたわけだから。渥美清は一九二八年（昭和三）の生まれで、いわゆる昭和一桁の世代である。僕の亡父と同じ年で、病魔と闘い続けた姿が重なってしまふ。

第四八作「男はつらいよ 寅次郎紅の花」

渥美清は末期癌で、医師の反対を押して出演した『男はつらいよ』のシリーズも、本作での演技が最後となった。没後に「寅次郎ハイビスカスの花 特別編」が作られたが、寅次郎に関しては、かつての映像などを再構成したものである。

「寅次郎紅の花」が封切りとなるとき、いよいよこれが最終作になるだろうという噂が流れた。渥美清の体力が限界に達していたこと、寅次郎にとって最高のヒロインであるリリーが出演していること、映画が制作される前のテレビ版では、ハブを捕りに奄美大島を訪れた寅次郎が、ハブに噛まれて命を落とすことなどが挙げられる。

冒頭で寅次郎が、阪神大震災でボランテニアをしている姿が放送され、柴又のおいちゃん、おばちゃん、さくらたちを驚かせる。これは当時の世相を反映した枕のようなエピソードである。

その頃、長い間音信が途絶えていた泉が訪ねてくる。縁談がまとまったことを、満男に告げに来たのだった。泉としては、満男に反対してもらいたかったのだろう。シヨックを受けた満男は、無断欠勤して津山つやまに向かい、泉の結婚式をぶち壊す。そのまま、列車と船を乗り継いでやって来たのは、奄美群島のかけろまじま加計呂麻島。満男は崖から飛び降り自殺することも考えていたが、たまたま居合わせたリリーに呼び止められる。

リリーに連れてこられた家には、居候している寅次郎がいた。

風来坊ふうらいぼうの伯父に似てきた満男と寅次郎の対面は、偶然の一致にしては出来過ぎているが、話の展開としては面白い。寅次郎とリリーは網走で出会った頃から、今までどんなことがあったか回想する。これは、『男はつらいよ』というシリーズで、寅次郎とリリーが共演した過去を懐かしむことであり、渥美清という俳優が後半生を、車寅次郎という役に徹したことを顧みることでもある。

泉の結婚式をぶち壊した満男について、寅次郎は男にとつて引き際きざいが大切だと説く。しかし、リリーから見れば、それは恰好かっこうを付けているに過ぎない。男と女の仲はきれいごとじや済まない、女は男に本気でぶち当たってきてほしいというのである。寅次郎が生涯独身を通す羽目に陥ったのも、引き際なんかにか

だわってきたからである。

本作で渥美清はかなり体調が悪く、演技の合間あいまもつらそうにしていた。それを見たリリー役の浅丘ルリ子は、これが最終作になると直感して、山田洋次監督に寅次郎とリリーを一緒にさせてほしいと申し出たという。ただ、山田監督はこの後の構想も考えていたので、願いは聞き届けられることがなかった。

第四九作「男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花 特別編」

テレビ版で奄美大島にハブを捕りに行き、逆に噛まれて「死んだはずだよ寅次郎」が、視聴者の抗議で映画として復活した。しかし、当初はこれほど長期にわたって制作されるとは、山田洋次監督も思っていなかったという。全五回で一旦制作は打ちきられるはずだったが、ついに第四八作までシリーズは続いた。山田洋次監督は、その後のストーリーも構想していたが、末期癌の手術を受けた渥美清は、一九九六年（平成八）八月に帰らぬ人となった。この作品は車寅次郎への挽歌ばんかとして、亡くなった翌年に制作されたものである。

冒頭では満男が駅でビールを飲みながら、靴のセールスのた

めの行商を行っている。寅次郎のような仕事をしているわけである。伯父さんは今頃何しているんだろうと、寅次郎のことを懐かしむ。満男が思い出すのは、寅次郎がリリーと出会った頃のこと。満男が回想するという形で、「寅次郎忘れな草」「寅次郎相合い傘」の一部と、「寅次郎ハイビスカスの花」の大部分が再構成され、それを満男の回想譚の中に埋め込んである。リリーが登場する作品には、前回の「寅次郎紅の花」もあつたわけだが、寅次郎とリリーがともに若く、もつとも幸せそうだったのは、「寅次郎ハイビスカスの花」の頃である。沖縄で病み上がりのリリーと寅次郎が、夫婦のような同棲生活を行っていた時期である。

前作でリリー役の浅丘ルリ子が、渥美清の体調の悪さを見て、これが最終作になるだろうから、寅次郎とリリーを結婚させてほしいと、山田監督に願ったが、かなえられることがなかった。そこで、シリーズの最終作の中に、リリーと寅次郎が同棲していた時期を再構成して、車寅次郎に対するお別れ会をしたというのだろう。

この作品の大部分は、「寅次郎ハイビスカスの花」から成っており、それを再び見たという印象が強い。やっぱり、一番の見どころと言えば、リリーが「男なんかの世話にはなりたくない。あなたと夫婦だったら別よ」と洩らし、照れた寅次郎が「所帯なんか持つ柄か」と言い放つと、「あんた、女の気持ちなんか分かんないのね」と涙を流す場面である。

制作されなかった続篇

渥美清の死とともに、『男はつらいよ』のシリーズは制作が困難になった。「寅次郎ハイビスカスの花 特別篇」は、かつての作品を再構成したものである。ただ、山田洋次監督の脳裏には、「寅次郎紅の花」より先の物語が構想されていた。

そこで、西田敏行にしだとしゆきを代役に立てて、続篇を制作するという案が出たが、山田監督は固辞こじしたという。『男はつらいよ』というシリーズは、渥美清という俳優がいたからこそ成立した映画だという思いが強かったからである。

このシリーズが未完という印象が強いのは、甥の満男と泉の関係が中途半端なままだからである。「寅次郎紅の花」で満男

が泉の結婚式をぶち壊したのは、未撮影の「寅次郎花へんろ」で、満男が泉と結婚するという構想があったからである。それを見届けた寅次郎は、テキ屋稼業から足を洗い、幼稚園の用務員として働くことになる。寅次郎の最後のヒロインとなるのは、幼稚園の園長役となる黒柳徹子くろやなぎてつこの予定だったという。子供たちと隠れん坊するうちに寅次郎は息を引き取り、町の人たちが寅次郎の思い出にお地藏さんを作るという結末だったという。

満男を泉と結婚させてあげたかったのだが、最後のヒロインがリリー役の浅丘ルリ子でなかったら、『男はつらいよ』のシリーズの印象は異なってしまっただろう。また、シリーズを完結させるためとはいえ、末期癌で苦しんでいた渥美清に、息を引き取る場面を演じさせるのも酷こくだったろう。

番外篇の「虹をつかむ男」

渥美清が一九九六年（平成八）に亡くなり、『男はつらいよ』シリーズは、山田洋次監督が構想した形では未完に終わった。ただ、山田監督は、「寅次郎紅の花」の次作として「寅次郎花へんろ」を構想していた。残された脚本を書き直し、『男はつらいよ』のスタッフを中心に制作したのが本作である。何よりも人の心を大切にする監督の思いが伝わり、単独に見ても味わい深いものであるが、この作品を百パーセント味わうには、『男はつらいよ』シリーズの全作品を見ておく必要がある。

冒頭の場面で、『男はつらいよ』で満男役だった吉岡秀隆が、よしおかひでたか亮りょうという青年として列車に乗っている。「寅次郎の縁談」と

同様に、就職先が決まらずに、父親とけんかして家を飛び出したという設定である。父親は前田吟まえだぎん、母親は倍賞千恵子で『男はつらいよ』と同じであり、住まいも葛飾柴又という設定である。

四国の山あいの町に「オデオン座」というはやらない映画館がある。館主は活男かつおという独身男。客の入りの悪い名画ばかり上映するため、いつも赤字ばかり出している。職人肌の映画技師常さんは、田中邦衛たなかくにえが演じている。田中邦衛と言えば、ドラマ『北の国から』で黒板五郎くろいたごろうを演じ、息子の純じゆんは吉岡秀隆が演じていた。『北の国から』の視聴者は、両作品のイメージが脳裏なうらに交錯こうさくさせることだろう。

西田敏行は渥美清の死後、車寅次郎役を引き継ぐのではない

かと噂されていた。確かに、無頼な印象は似ているし、語りだけでイメージを醸し出す能力という点で、渥美清に引けを取らない。もし寅次郎役を引き受けていたら、充分に演じ切れたと思う。ただ、余りに演技が個性的で、西田敏行の特長が演技によく出ている。渥美清の作った車寅次郎というイメージを守りたいという山田監督の意志で、『男はつらいよ』のシリーズは打ち切りとなったのである。

当初は同シリーズの一つとして構想されたため、活男と寅次郎は重なるところが多い。活男は喫茶店を経営する未亡人八重子に恋をしている。八重子の方でもその気持ちを充分すぎるほど知ってはいるが、再婚相手としてまでは受け容れられない。最後はふられる活男は、寅次郎と同じように、失恋しても

引き際を大切にし、温かくヒロインを送り出す。

もう一つの特徴としては、映画の名作を多く映像の形で引用している点である。ジュゼッペ・トルナトーレ監督の『ニュー・シネマ・パラダイス』、アンリ・コルピ監督の『かくも長き不在』、ジーン・ケリーおよびスタンリー・ドーネン両監督による『雨に唄えば』、小津安二郎監督の『東京物語』など。ちなみに、その作品の父親役は、『男はつらいよ』シリーズで御前様役を演じた笠智衆である。あの独特な、淡々とした語り口は『男はつらいよ』になくはならない存在だったが、シリーズ終了前の一九九三年（平成五）に亡くなっている。ここでも二重写しの異化効果を、山田監督は狙っているのだろう。

最後の場面で、活男は気に入っていた亮を、東京に戻すために首にする。別れの前に二人で見たのは、『男はつらいよ』の第一作。渥美清も、妹さくら役の倍賞千恵子も若かった。この作品は『男はつらいよ』シリーズに命を捧げた俳優、渥美清に対するもう一つの挽歌であると言える。

懐かしい「とらや」、おいちゃん、おばちゃん、タコ社長、舎弟の登、最初の恋人役である冬子の姿も映った。これを見ていた吉岡秀隆は、もう二度と『男はつらいよ』シリーズに出られないんだと思い、涙がこみ上げて止まらなかったという。長年シリーズを見てきたファンにとっても、もうあの世界は味わえないんだという思いで、胸がいっぱいになったことだろう。

なお、西田敏行の活男と、吉岡秀隆の亮の心温まる関係が好

評だったのでだろう。『虹をつかむ男』はもう一作制作されることになる。

番外篇の「虹をつかむ男 南国奮斗篇」

これは『男はつらいよ』とは関係がない。また、前作の『虹をつかむ男』とも設定が異なっている。前作では「オデオン座」は四国の山あいにあったはずだが、鹿児島という設定に変わっている。亮も葛飾柴又でサラリーマンの両親と、マンション住まいをしていたはずだが、今回は戸越銀座とこしぎんざにある平山工務店の息子という設定である。

東京に出てきた映画館の館主活男は、酒をめぐるトラブルから、錦糸町警察きんしちやうの留置場にいる。身元引受人として、以前活男の映画館で働いていた亮が呼び出され、亮の家族の厄介となることに。ところが、風呂桶を壊すやら、熱い鍋の載ったお膳を

引っ繰り返すやら。おまけに、ものすごいいびきをかいて、さんざん迷惑をかけて翌朝出て行く。

秋葉原の電気店を解雇された亮は、父親とけんかして家を飛び出す。向かった先は鹿児島の「オデオン座」。すでに閉館しており、行方を捜してたどり着いたのは、奄美の喜界島きかいじま。ここで亮は、子連れのシングルマザー節子と知り合う。ただ、節子には荒くれ者の兄がおり、妹が東京の男に捨てられたことに怒りを抱いている。節子に好意を持った亮に対して、理不尽りふじんな暴力を振るう。

その頃、亮はふたたび活男のもとで、映画の移動上映の助手として働くようになっていた。なぜ「オデオン座」が四国の山あいから鹿児島に変更されたか。それは場面を奄美の島々に移

すためには、四国からではあまりに唐突だと感じられたからだろう。また、亮の家族が変更されたのも、『男はつらいよ』とは無関係の作品として設定したかったからだろう。

活男の方も、昔映画館で働いていた松江と再会し、ボートの中で熱い夜を過ごす。ただ、松江は夫も子供もいる身である。一夜の夢でしかなかったはずなのに、活男は松江の自宅に押しかけていき、迷惑がられてしまう。何事も本音で生きていく活男は、『男はつらいよ』の寅次郎のように、失恋を運命づけられているのだろう。

ただ、『虹をつかむ男』は二作をもって制作が打ち切られた。活男自身、魅力的な人物として描かれているが、映画の移動上映をしている設定では、バリエーションを生み出すことが難しい。

い。また、亮という青年も純情で好感が持てるが、寅次郎のようにアウトローとして生きる人間ではない。いずれ結婚して、平凡ながらも幸せな家庭を持つはずである。その人生の一時期を切り取った作品としては、ほのぼのとした映画に仕上がっている。